

コトワザあらかると



2024年12月15日

日本ことわざ文化学会
8号

干支のことわざ — 龍 —

時田 昌瑞

<表紙絵の解説>

龍に関することわざの絵は、「雲龍」といわれる文様が「龍吟じれば雲を呼ぶ」のことわざと見なせば古代から数限りなくある。

1. 掛け軸「龍吟じれば雲を呼ぶ」。琳派の俵屋宗達による墨一色の複製。一般には「龍図」と呼ばれる。原物であれば少なくともゼロが二つはつくはず。狩野派等の有名絵師が沢山の作品を残している中でも名品として知られる。サイズは縦 79 cm、横 33.3 cm。
2. 灰吹きから龍 一枚刷り刷り物の一部分。「夢想兵衛胡蝶物語」食言郷産物之図の一部で「うその名人」で用いられている。うその中身として「灰吹きから大蛇」のことわざを描いているはずだが、絵は蛇ではなく龍。ことわざとしては「灰吹きから龍が上がる」との表現もある。絵師は不詳で江戸後期から幕末ころの作品と推定。
3. 画竜点睛 有名な中国の故事の一つ。画家が壁に龍を描き、最後に瞳を書き入れると本物の龍となって昇天したというもの。図は江戸時代の志野焼の皿。志野焼の特徴である白い肌と繊細なひび模様がみてとれる。言い回しは有名だが、絵などの作品は希少。骨董収集を始めた早い時期に骨董市で偶然手に入った掘り出し物の一つだ。
4. 龍に翼の勢い 「鬼に金棒」「弁慶に薙刀」と同じで、力のある者がさらに強力になることの譬え。翼のない龍が翼を得ることから。図は「新版双六よいことづくし」の中の一部。同双六には、よいこととして、「宝の山入」「あいた口にぼた餅」「両手に花」など 25 のことわざとその絵が描かれており、ここの龍は 7 番目のもので明治期の作品。
5. 雲龍文 龍に雲をあしらった文様は雲龍文と呼ばれ種々の物品にある。刀の鐔、小柄、目貫、印籠、根付、焼き物では絵皿、水滴などいろいろ。図は戦後の香合の焼き物。

<龍に関することわざ>

日本には約 50 のことわざがある。絵画などの作品はここでは除外して実際の用例があるものに限定して示すことにしたい。

- 1 番古いくことわざは何？ 最古とみられるのが「龍髭リュウシを摩する如く虎尾を踏む」で空海の『性霊集』巻 10 にある。龍の髭を撫で虎の尾を踏むことから。少しあとの鎌倉時代の『宝物集』などでは「龍の髭をなで虎の尾を踏む」の言い回しとなって使われた。さらには「龍の髭を撫でる」「虎の尾を踏む」と別々になって用いられるようになる。
- 2 番目に古いものは何？ 「龍の水を得たるが如し」で平安時代の『今昔物語』巻 1 第 16 にある。意味は強い者がさらに勢いをますこと、また、時勢に乗り大いに活躍することの譬えだ。室町時代以前にもいくつか見られる古いものだが、江戸時代以降はほとんど用いられていないようだ。
- 使用例が最も多いものは何？ 「竜頭蛇尾」で全部で 62 例となる。鎌倉時代の道元から江戸期までが 11 例、明治期が 32 例、戦後は 19 例。明治期が常用の域にあるが、他の時期でもそこそこ用いられていたことがわかる。戦後に限れば一番使われている。
- 新しい龍のことわざは？ 既存の辞典にないものもいくつかみられるが、一番新しいのが「龍とぼうふら」だ。これは太宰治『鉄面皮』1943 年で用いられたもので作者の創作とみられる。意味は大きな違いがあること。「雲泥の差」「月と鼈」「雪と墨」などの類。

コトワザあらかると8号

目 次

干支のことわざー 龍 ー <表紙絵の解説>	(02)
目 次	(03)
ゼロのない世界	渡辺 慎介 (05)
「画竜点睛」への道 ― 竜のことわざ東西探訪	三木 恒治 (12)
虎は死して皮を留む 国分寺跡探訪記。歩き旅。	蟻川 剛 (19)
法螺ことわざの復権を！ ― 嘘ことわざ諸々 ―	時田 昌瑞 (26)
「私家版 卓球カルタ」を創るための序章	山口 政信 (33)
ことわざ献本珍道記 …いにしえの先行く人の跡見れば踏みゆく道は紅に染む	清水 泰生 (37)
「ことわざの共通性」	佐古恵里香 (40)
「逢佛殺佛」から「神に逢うては……」へ	藤城 孝輔 (42)
認知症介護と<負けるが勝ち>	小森 英明 (44)
持続可能な社会づくりとことわざ	辻本 雄次 (46)
執筆者紹介	(48)

ゼロのない世界

渡辺 慎介

昨年の日本ことわざ文化学会大会において、蟻川剛会員による研究発表「ことわざの『1』と『0』」に触発されて、このエッセイを書いています。その講演で蟻川氏は様々なことわざを調べてみると、「一」、「二」、「三」、……などの数字がことわざに読み込まれる例を見出す事はできますが、「0」が出ることはないことに着目して、おそらく「0」は使われていなかったのではないかと推論しておられました。私の視点も蟻川氏と変わりません。「ゼロ」または数字の「0」が江戸時代に使われていたのかという、素朴な疑問なのです。

結論から申し上げれば、「ゼロ」は使われていなかったということもできるし、使われていたということもできる、そういう数字であったということになります。人を惑わす様な表現で申し訳ありませんが、その理由を順次お話ししたいと思います。

まず、どうして数字の「ゼロ」が必要なのか、その理由を考えます。それは位取りに欠かせないからです。たとえば、「1789」という数を考えてみます。日本の伝統的な書き方…記数法…では、この数字は「一千七百八十九」となります。つまり、一の位の数が「9」、十の位の数が「8」、百の位の数が「7」、千の位の数が「1」の数が、「1789」なのです。漢数字による表記は、それを忠実に文字によって表わしています。漢数字による表記は、洋数字の「1」から「9」までを使った表記に比べ煩雑であることは否定できません。

今度は、逆に漢数字で表わした数字を洋数字に書き換える作業をやってみます。たとえば、「二千二十四」は、百の位に数字が欠けている（空位の）数です。これを「1」から「9」までの数を使って表わすことができません。「224」と書けば、「二百二十四」ですから、元の数とは異なります。そこで登場するのが「ゼロ」です。百の位に数がないことを示す「0」を百の位に書き加えれば、この曖昧さを回避できます。つまり、「2024」と表記すればよいのです。洋数字の場合、「1」から「9」までだけを使ったのでは正しい位取りができませんが、「0」から「9」までの数字を使えば、正しい位取りの数字が表現できます。

ここまで「0」は位取りに必要な数字と考えて来ました。言わば空位を示す記号のように見て来たのです。空位を何らかの記号で示さなければ正しい数字を表記できないことに気付いた人々は、紀元前から存在していました。メソポタミア文明では、彼らは60進法を使い数字を表わしていましたが、空位に何かの印を書き加えないと数が正しく表現できないことに気づいたのです。つまり、「2024」と「224」の区別ができない不具合に気づき、彼らの使っていた楔形文字の間に斜めの楔を二本挿入することによって、空位を表しました。これにより、「2024」と「224」を区別しました。中国でも同じように空位の数字が存在しない不具合を感じていたようです。紀元前十四世紀の頃から10進法を採用していた中国では、空位の数字を記号で示す代わりに、空位の桁を空白にして、空位を示したそうです。数字の「2024」は、「2（空白）24」つまり「2 24」と書いて、「224」と区別しました。しかし空白は、それを書き写す時に紛らわしいという欠点があったため、「0」の存在が伝えられた後に、中国では空位を丸「○」の記号で示すようになりました¹⁾。縦長の「0」の文字は、中国になかったため、それに似た「○」を使ったのでしょう。

しかし、数字の「ゼロ」には、空位を示す以外にも数としての重要な役割があります。

それに気づいたのはインド人でした。古代インドで数「0」の意味というか、概念が確立されたのは、5世紀頃とされています。628年に、数学者・天文学者のブラーマグプタ（ブラフマグプタ、Brahmagupta）はその著書において、0と他の整数との加減乗除を議論し、一つの点を除けば現代の考えに近い結果を示しました。現代の考えとは異なるその一つの点は、 $0/0$ （0割る0）です。彼は $0/0=0$ としました。現代では、一般に0以外の数 a に対して $a/0$ 、つまり a を0で割る演算は「計算が定義できない」と言います。特に $a=0$ のとき、 $0/0$ は不定であると言います。この点だけが、ブラーマグプタと現代の考えが相違しているところです。

今の小学校では、2年生で掛け算を学び、3年生で割り算を習うようです。私の頃は4年生で掛け算を学びました。記憶力の悪い私がそれを覚えている理由は、4年生の夏休みに引越をしたため、掛け算の九九で苦い思いをした経験があるからです。夏休みの前は、今の神奈川県相模原市の小学校に在籍していました。夏休み中に横浜に引っ越したため、休み明けから横浜市の小学校に通うことになりました。授業が始まり算数の時間になると、いきなり掛け算の九九の復習から始まりました。一学期に九九を覚えられなかった生徒が次々に立たされて掛け算の九九を暗唱させられます。相模原の小学校では、九九をまだ習っていないため、私はいきなり落ちこぼれ組に組み入れられ、すぐに九九を覚えなければならない羽目になったのです。そんな経験から掛け算を4年生で勉強したことを覚えているのです。その掛け算を今は2年生で学ぶと聞き、驚いてしまいました。一番下の孫が小学校3年生の終わりの頃に、もう割り算を習ったというので、簡単な割り算の問題を出したことがあります。紙に書くのではなく、口頭で問題を出し口頭で答えられる程度の簡単な割り算の問題です。何問かの問題を出した後に、「それなら0割る0は？」と意地悪い問題を出すと、即座に「1」の答が返ってきました。インドのブラーマグプタとは異なる答でした。学校でそう教えられたのかもしれませんが。あるいは、同じ数どうしの割算は1になるとでも覚えていたのかもしれませんが。孫に「どうして？」と聞こうと思いましたが、そもそも $0/0$ という問題自体が適切ではないので、さらなる質問は思い止めた次第です。

さて、ここで数の書き方である記数法に戻ることにします。「0」から「9」までを使う記数法は万能です。どんな大きな数も、また、どんな小さい数も表現できます。たとえば、大きな数の場合、「ゼロ」をいくつも書かなければなりません。光の速さは約3億メートル毎秒です。これを 300000000m/s と書きますが、「ゼロ」の数が多くて書くにしても読むにしても面倒ですし、間違いを犯しやすい。そこで、10のべき乗を導入します。最も簡単な10のべき乗は、平方 10^2 です。これは、 $10^2=10\times 10=100$ になります。一般に、 10^n は10を n 回掛け合わせることでなりますから、1の後に n 個の0が付く数になります。これを使えば、光の速度は $3\times 10^8\text{m/s}$ と簡単に表わすことができます。この数字 3×10^8 を読む時に、わざわざ「三億」と読む必要はありません。単に「三掛ける十の八乗」と読みます。 3×10^8 全体を単なる数字と考えるのです。一方、小さい数を表わすには、 10^{-n} のべき乗を使えば、いくらでも小さい数を表わすことができます。 $10^{-n}=1/10^n$ だからです。

それに対して、漢数字は大きな数を表わすことができません。一、十、百、千、万、億、兆、京^{けい}くらいまでは、記憶力の悪い私でも何とか覚えています。万 $=10000=10^4$ 、億 $=10^8$ 、兆 $=10^{12}$ 、京 $=10^{16}$ などですが、まだまだ先があります²⁾。日常的には、国家予算が100兆円規模ですから、国家予算が今の100倍になれば、1京円予算ということもあり得ます。しか

し、今の国力を考えればそこ迄到達するのは容易ではなく、相当の年月を要することが予想されます。その前に、少子化により予算規模を縮減せざるを得なくなる事態に遭遇してしまうかもしれません。したがって、日常用いる数字としては、兆という大きさの数字だけで当分は間に合いそうです。一方で、京という言葉は科学技術の分野ではすでに使われています。一秒間に1京回、つまり 10^{16} 回の演算を実行したスーパーコンピューター「京」が2019年迄使われていました。現在はその100倍の速さで計算をするスーパーコンピューター「富岳」が稼働しています。1秒間に100京回 $= 10^{18}$ 回演算をするというのですから、気の遠くなるような演算回数です。名称「富岳」の由来は、葛飾北斎の「富岳百景」や太宰治の小説「富岳百景」のもじりで、「富岳100京」にあるという駄洒落があります。

すでに述べましたが、漢数字で書けば位取りをする必要はありません。空位に「0」とか、中国伝来の「〇」を書き込まなくても、桁を誤る心配はありません。「2024」を「二千二十四」と書けば、百の位が空位であることは明白です。ですから、わざわざ「二千〇二十四」などの煩わしい書き方をしなかったのです。ただし、計算をする時、江戸時代はソロバンを使って計算をしていましたが、ソロバンに「2」を置く時、「二千二十四」の「二千二」まで読んだ段階では、次が「二百」なのか「二十」なのかを判断できません。昔、ソロバンを習った時、「二千二十四」を「二千飛び二十四」とか「二千飛んで二十四」と読んだのは、空位の存在をあらかじめ知らせるためでした。その程度の不便があるだけで、それ以外に漢数字の表記で困ること、間違いを起こすような不都合はありません。ですから、日常生活において、「ゼロ」や記号「〇」は必要なかったのです。必要が無ければ使われることはありません。つまり、「ゼロ」は使われていなかったのです。

ソロバンの読みに、「二千飛び二十四」とか「二千飛んで二十四」があると書きました。「飛ぶ」には、順序を経ないで、間をこして先へ進む、の意味がありますから、「飛ぶ」の字を当てればよいと思いますが、「トビ」とか「トンデ」とかの表記もしばしば見ます。私がとんでもない勘違いをしているのではないかと危惧から、江戸時代のソロバンの本を調べることにしました。すると、意外な発見もありました。「算法便覧」³⁾の用語説明の中に「零」を「一けた飛ぶなり」と解説しています。つまり空位を飛ばすことを零と呼んでいたのです。したがって、「二千零二十四」と読んでいた可能性があります。同時に、江戸時代から「飛ぶ」の字を使っていたことも分かり、一安心しました。他のソロバンの本には、「零」の説明に「略して令とも書く」とか、「零零とは二位(けた)とぶ也」とか、「〇をしるすにおなじ」の説明もあります。最後の説明から「〇」も、空位を表わす記号として江戸時代から使われていたことが分かりますが、これは少し後にも触れます

「ゼロ」に対応する漢字は、現代では次に示す広辞苑の説明のように「零」^{れい}です。この「零」は、「零落」とか「零細」などの熟語に使われますが、「ゼロ」の意味には使われていません。ソロバンの零も「ゼロ」の意味ではありません。

広辞苑で「零」^{れい}の意味を調べますと、①数えるべきものが一つもないこと。また、目盛りなどの基準・起点。②[数]数0が零とは、任意の数 a に対して $a+0=0+a=a$ が成り立つこと。整数に含める。ゼロ。とあります。②は現代的な「零」の解説です。上に述べたソロバンの「零」は、①の意味に使われていたのです。数えるべきものがないからその位(桁)を飛ばして次の桁に移る、の意味です。

一方、漢和辞典には、㊦ゼロ。何もないこと。「零点」「零度」「零時」㊦オちる[オつ]①

花などがしぼみ落ちる㊤雨がしとしとと降る。㊦落ちぶれる㊧はした、あまり㊨きわめて小さい、と記されています。三番目の「あまり」は「余り」であり、余分とか剰余の意味です。先程、「二千二十四」を「二千飛び二十四」と読むと書きましたが、実は「二千余り二十四」と読むこともありました。

いずれにしても、江戸の日常生活において「0」の概念は不必要でした。したがって、「0」は使いませんし、「0」の意味にも「零」を使わなかったのです。数は常に「1」から始まりました。基本となる数は、出発点の「1」でした。ことわざにも「一に看病二に薬」とあり、病を治すには身近な人の看病が一番効目があり、薬は二の次だ、というのです。もっとも、「一に養生二に看病三四がなくて五に薬」というものもあるそうです。残念ながら「零」を使ったことわざを見たことはありませんし、「ゼロ」もありません。「ゼロ」以外の数字を使ったことわざは少なくありません。「鶴は千年亀は万年」は、大きい数字を使ったことわざです。一方、数字を使った四字熟語も数多くあります。「一石二鳥」、「朝三暮四」、「五臓六腑」、「七転八起」、「九死一生」、「二束三文」、「四分五裂」、「六根清浄」、「七転八倒」、「九牛一毛」、「二人三脚」、「四書五経」、などなどです。「十」、「百」、「千」、「万」を含むことわざや四字熟語も「万死に一生を得る」、「一事が万事」、「千客万来」、「千言万語」など少なくありません。しかし、数字の「億」を使った四字熟語やことわざは見ません。

「加賀百万石」の語は今でも使われます。日本最大の石高を誇った加賀藩の石高です。この石高は時代により若干変化しますが、江戸中期以降は空位のある数字「百二万五千石」が正確な石高でした。すべての藩の石高の合計は3100万石、幕府の石高は650万石だったそうです。また、江戸時代後期の人口は、多く見積もっても江戸で200万人程度、全国で3000万人程度であったそうです。そうしますと、大きい数として用いられたのは、せいぜい100万とか1000万という大きさになります。ですから、「億」という数字は、一部の知識人はその存在を知っていたのですが、使う必要がなかったし、実際に使わなかったと考えられます。数の「零」と同じように大きな数字「億」も使う必要がなかったので、一般庶民もそれを使う場面は皆無でした。その結果として、ことわざにも四字熟語にも二つの数字は表れなかった、そのように考えられます。ただし、数のゼロ以外の意味では、「零」は四字熟語で使われます。「断簡零墨」(文章の断片。書き物の切れはし。)、^{だんかんれいぼく}「零丁弧苦」(落ちぶれて、助けてくれる者もなく、一人で苦労すること。)^{れいていこ}などが、その例です。一方、「億劫」には「億」の字が使われています。これは「億劫」が転じたもので、「劫」はゴウとも読み、仏教の言葉で、極めて長い時間の単位、多く宇宙の生滅などについていう、と広辞苑にあります。使用例に「永劫」があります。「億劫」は極めて長い時間の意ですが、^{おつこう}「億劫」は時間が長すぎてやりきれないため、面倒くさくて気が進まないことの意味になります。^{おつこう}「億劫」は、大きい数字「億」に由来する数少ない熟語の一つです。

「何もない」を表わす語は「零」ではなく「無」だったのです。ことわざにも、「無芸大食」とか「芝居は無学の早学問」などに思い当たります。この他にも、「ない」を意味する「無病」、「無理」から始まることわざがあります。「無」を含む四字熟語は、無限にと言っては大袈裟ですが、数多く存在します。

これまで、江戸時代の日常の生活において「ゼロ」、「零」、空位記号「〇」について必要性の観点から、それらの語が使われなかった理由を考えて来ました。「ゼロ」も数としての「零」も庶民には全く関係のない文字であり、また概念だったのです。だから、使われな

かった訳です。しかし、庶民の日常生活だけで江戸時代の実像に迫ることができるとは限りません。広く文化全般を見渡す必要があります。中でも、自然科学、数学、技術などに目を向けることが重要です。特に数学…和算…に目を向ける必要があります。

数学の分野で筆頭に挙げられるのは関孝和（1640年頃？～宝永5(1708)年）です。彼の生まれる10年程前の寛永4(1627)年に「塵劫記」という算術書が発刊されました。著者は京都の豪商角倉一族の吉田光由でした。その本は、掛け算九九などを基礎にしたソロバンによる四則演算の計算法の他に、面積の計算や簡単な測量術、利息や両替などの実用的計算を採り入れています。さらには、平方根・立方根の求め方などやや専門的な内容も含まれています。この一冊に当時の日常生活に必要な算術が網羅されていたのです。「塵劫記」は類書がない事もあり、よく売れたそうです。そのため、海賊版の出版も少なくなかったようです。寛永8年、11年、18年に改訂を重ね、そのたびに内容を充実させました。寛永18(1641)年度版の「新編塵劫記」には、巻末に解答のない数学の問題12問を掲載しました。やや難しい、とは言っても今の高校から大学初年度程度の数学の問題です。この問題は「遺題」あるいは「好み」と呼ばれます。「塵劫記」は算術の本であり、数学の本ではありませんでした。だから、この本を教科書に使ったソロバン塾が、町の中で大いに繁盛したそうです。そんな塾の中には、計算の速さだけを自慢にする講師もいたようです。そんな講師が大手を振っている状況を嘆いた吉田光由が、「この問題が解けるか塾の先生に聞いてごらん」と生徒に示したのが、12問の「遺題」であったようです。しかし、吉田のこの思いは意外な方向に進展することになります。

12年後の承応2(1653)年に、榎並和澄は「参両録」を出版し、その中で「塵劫記」の遺題のいくつかを解くと同時に、この程度の問題は難問というには程遠いと「塵劫記」を批判し、自らも8問の遺題を「参両録」に掲載しました。さらに、万治2(1659)年になると山田正重が「改算記」を著わします。「改算記」でも、「塵劫記」の遺題に解答を与えるとともに、自ら11問の遺題を提出しています。このように、前の数学者の遺題を解くとともに、新たな遺題を出すリレー形式の問答を遺題継承と呼びます。遺題継承が日本の数学…和算…のレベルを高めたことは間違いないようです。これは「塵劫記」の著者・吉田光由が当初考えた遺題の趣旨とは大きく逸れましたが、「怪我の功名」で良い方向に事が進んだということになります。

さて、関孝和の登場です。孝和は延宝4(1676)年頃、甲州の徳川綱重に勘定吟味役として仕え、綱重没後は綱豊（後の6代将軍徳川家宣）に仕えました。宝永元(1704)年に綱豊が5代将軍の世継ぎとなり江戸城に移ると、孝和もそれに従い御納戸組頭に昇進して御蔵米250俵10人扶持（後に300俵）となったと伝えられています。

若い頃の孝和は、割り算の九九である八算を知らなかったといいますが…実は私もそれを知りませんでした…。家来の者たちが「塵劫記」を読んでいるのを見てそれを借り、すぐにそれを読み通し内容を理解してしまったそうです。それからは、算書があれば手当たり次第に読み漁り、遺題もすべて解いたようです。しかし、算術から数学へ内容を高度化するには、たとえば方程式という概念が必要でした。その方程式を立ててその解を求める方法は、すでに中国にありました。天元術と言います。それを紹介した書籍「古今算法記」（寛文11(1671)年）を書いたのは、大阪で活躍した和算家の坂口一之でした。日本で最初に天元術を理解したといわれる橋本正数の学派に属していました。日本に紹介された天元

術は未知数が一つの場合に限って解くことができます。未知数の係数を表わす数字を算木によって表わす方法を採用していたためです。算木は木の棒を使って数を表わす方法です。未知数を x とすると、 x^2 や x^3 を含む方程式を立てて、それを近似的に解くのが天元術でした。「古今算法記」には、「改算記」などで出された遺題が天元術を駆使して解かれています。さらに新たに 15 問の遺題を巻末に与えました。それらの問題は、複数の未知数が含まれ、複雑な計算を経なければ一つの未知数の式に変形できない難問ばかりでした。

関孝和は複数の未知数が含まれた式を算木ではなく紙に書く方法（傍書法という）を考え出し、筆算による式の加減乗によって未知数を消去して、答を導き出す方法（^{てんざんじゆつ}天竄術という）を考え出しました。傍書法と天竄術を用いて孝和は「古今算法記」の遺題 15 問すべてを解き、延宝 2(1674)年に「初微算法」を著わし、解答を公表しています。その解答には批判もあったようですが、孝和の弟子の建部賢弘が貞享 2(1685)年に「初微算法演段諺解」を刊行し、孝和の解の詳細を記しました。最終的な解（答）を行列式の形で表現しています。行列式の使用はヨーロッパよりも 10 年ほど早く、つまり関孝和が最も早く行列式を使ったことになります。

それでは、関孝和をはじめとする江戸時代の和算家は、「ゼロ」を使っていたのでしょうか。数字を筆記する時、「1」は横棒、あるいは縦棒一本を、「2」は横棒、あるいは縦棒二本を、「3」、「4」、「5」も棒の本数が変わるだけで表記法は変わりません。「6」以降の表記は省略します。縦棒を使うか、横棒を使うかは数字の桁に依存します。奇数桁には縦棒、偶数桁には横棒のような規則がありました。また、空位の桁は「○」で表します。ですから「2024」は、「(横棒二本) ○ (横棒二本) (縦棒四本)」となります。関孝和の表記法です。関孝和以降は、和数字二や四を使って「二〇二四」と書いたようです。未知数 x 、 y 、 z などは、甲、乙、丙などの文字を用いました。

関孝和をはじめとする江戸時代の和算家は「0」の代わりに「○」を使い数学の問題を解いていたことは間違いありません。しかも、「○」を通常の「0」のように計算していたはずですが、そうでなければ、未知数を消去する演算ができないからです。つまり、数 a に対して、和： $a + 「○」 = 「○」 + a = a$ 、差： $a - 「○」 = a$ 、 $「○」 - a = -a$ 、積： $a \times 「○」 = 「○」 \times a = 「○」$ 、商： $「○」 / a = 「○」$ 、など「○」を「0」と同じ意味の数字と理解し、また計算に使用していました。それでは、和算家は数字の「二〇二四」をどのように読んでいたのでしょうか。「二千飛び二十四」でも「二千余り二十四」でもなく、「二千空^{くう}二十四」と読んでいたらしいのです。桁を表わす漢数字を省略した「二空二四」だったのかもしれませんが。

他の読み方もあります。0.493039 立方尺の読み方を書いた本に、四寸九ふ三の三九と書いた本（算用記）、百か四十九三分三毛九糸と書いた本（元和 8 年の割算書）、百か四十九三分三毛九ほつと書いた本（寛永 4 年の割算書）があるということです⁴⁾。この内、算用記の九ふは、九分の意味でしょう。また、二つの割算書の百か四十九は、100 分の 49 尺の意味であろうと考えます。問題は算用記にある「三の三九」です。ここで使われている「の」は、空位を表わす「の」なのです。説明文には「のは零の意味」とあり、「の」は「空位の零」を表わしているのです。数学がソロバンの「零」の影響を受けたか、あるいはその逆なのかもしれません。様々な読み方があるものです。読み方は決まっていなかったのかもしれません。

和算家は、「○」を使い、数字の「ゼロ」の概念を正しく理解して計算を行っていました

が、それを「ゼロ」と読むことはありませんでした。つまり江戸時代に和算の世界には「ゼロ」の概念はあり、それを実際に使っていましたが、数の「ゼロ」は使われていなかったのです。日常生活においても、和算の世界においても「ゼロ」はなかったのです。

ところで、先に「2024」を漢数字では「二千二十四」と書けば位取りを間違えることはなく、わざわざ「二千〇二十四」と書く必要はないと申し上げました。確かにその通りで、わざわざ空位を示す「〇」を書き込むことは、庶民の生活の中ではまずありません。しかし、庶民が親しんだ講談の中に、この「〇」を使った表現を一度だけ見つけました。江戸から明治にかけて活躍した三遊亭円朝の講談や落語が明治の初めに速記によって記録され、出版されました。現代では、岩波書店から「円朝全集」⁵⁾として発刊されています。その八巻にある「熱海土産温泉利書」の出だし、第一席にこんな文言が出てきます。

処は相州小田原にて、お高は拾一万三千〇二十九石余と云ふ十露盤の勘定見たやうなお秩禄で、大久保加賀守さまと申まして大したお家柄で御座い^{ます}升。

「113029」の百の位が空位になっているのを、「〇」で表記しています。どんな読みをしていたかは分かりませんが、円朝が空位を読んだから速記に残っていたのでしょう。この全集にはすべての漢字にルビが振られていますが、当該箇所にはルビはありません。数字にはルビを振らないことになっているようです。江戸時代に生きた円朝の発音が直接聞き取れる箇所なのですが、ルビがないのは残念至極です。

デジタル時代の現代では、たとえばマイクロソフトワードの日本語入力を使い、「まる」を入力すると、変換候補として漢数字の〇などが表示されます。次に、「ぜろ」を入力すると、半角の0、全角の〇、漢数字の〇、カタカナのゼロなどが表示されます。驚くことに、「零」まで出ます。先ほど示した漢和辞典で、「零」は「れい」と読まれ、それに「ゼロ」の意味を付け加えるようになったのは洋数字…アラビア数字…が導入された明治以降、それも維新から随分経てからと推定されます。しかも音読みは「れい」です。それにもかかわらず、「ぜろ」を入力すると「零」が出てくるのです。それを「ゼロ」と読む最初の例は、おそらく「ゼロ戦」ではないかと想像しています。「ゼロ戦」は太平洋戦争中の海軍の戦闘機の名称「零式艦上戦闘機」の通称で、当初は「レイ戦」と呼ばれていたと思いますが、今では「ゼロ戦」、ないしは「零戦」が普通に使われています。もう一つの例が「零敗」^{れいはい}です。最近では、それを「ゼロはい」と読むことが多いようです。文字の読み方や意味は時代とともに変化します。変化を素直に受け入れるのが老人の嗜みであると心得てはいますが、さすがに本稿の表題に「零」を使うのには躊躇します。

文献4)を教えて下さった嘗ての研究仲間である薩摩順吉さんに感謝申し上げます。

- 1) ジョセフ・ニーダム著、東畑誠一他日本語版監修「中国の科学と文明」第4巻「数学」思索社 1975年。
- 2) もっと大きい数字を表わす漢数字はWikipedia「命数法」の項に記されている。10⁶⁸までの漢数字が示されている。
- 3) 武田真元著「算法便覧」天保9(1838)年。この本は京都大学貴重資料デジタルアーカイブにおいて閲覧可能。
- 4) 平山諦著「和算の誕生」恒星社厚生閣 P.48 1993年。
- 5) 「円朝全集」全13巻、別巻2冊 岩波書店 2012年11月～2016年6月。

「画竜点睛」への道——竜のことわざ東西探訪

三木 恒治

序

先日、「白竜」と名付けられた地球観測衛星が打ち上げられたというニュースを耳にした。地球の大気の3Dモデルを構築し、気圧の流れから干ばつや洪水を察知するというのが主なミッションであるが、搭載されている主要機器の一つが日本製ということで注目を集めている。このネーミングは白い船体を連ねている外観が竜の尾に似ているところからきており、JAXA（宇宙航空研究開発機構）の命名だという。余談ながら、私などはミュージシャンとしても活躍している演技派俳優の「白竜」の方が馴染み深いが、どうやら両者は何の関係もないようである。

奇しくも今年の干支は辰（竜）である。一昨年寅年の折に阪神タイガースについて触れたが、今回は中日ドラゴンズの出番だ。私は長年、名古屋城の金の鯨が竜の姿に似ているのでこの球団名が付いたと思い込んでいたが、どうやら球団初代オーナーが辰年生まれということに困んでいるようだ。プレイヤーでは、高校時代「板東・村椿、延長18回の投げ合い」で甲子園を沸かせ、引退後はタレントとして活躍し、明るいキャラでお茶の間の人気者でもあった板東英二が昭和15年の辰年生まれだ。同年生まれの王や張本といった伝説的な選手に比べると彼の影はやや薄い、プロ野球での実績はともかく、球界出身芸能人の草分け的存在として異彩を放っていた。近年ブラウン管から姿を消したのが惜しまれる。中日ドラゴンズもここ二年間セリーグ最下位と低迷しているが、そのうち昇り竜となって蘇ってほしいものである。

今回の論考は「竜」のことわざについての考察が主眼であるが、まずは「竜」を使ったさまざまな言い回しを概観し、次に「竜」のことわざの東西の比較対照、最後に「画竜点睛を欠く」について言及して締めくくりとしたい。

1.

さて、「竜」（漢音ではリョウ、呉音ではリュウと発音、「龍」の字もあるが、本稿では圧倒的に記述例が多い「竜」で統一する）の名が入った言葉を探してみると、十二支では唯一架空の動物でありながら、結構いろんなところで目にする。植物では、「竜胆」（りんどう、根の味が竜の胆のように苦いことに由来）、「リュウゼツラン」（葉の先ののこぎり状のとげを竜の舌に見立てている）、「竜眼」（実の形が竜の眼に似ている常緑樹）などが挙げられる。軍隊では火器で武装した騎兵を「竜騎兵」と呼び、最前線の白兵戦で活躍し敵側から恐れられたが、この命名は勢いよく敵陣に突入するさまが火を噴く竜に喩えられたものだ。「竜吐水」は、江戸時代に発案された火消道具で、こちらは竜が火ではなく勢いよく水を吐く姿に似ているところから名付けられた。今では死語となりつつあるが、腕時計のつまみは「竜頭（りゅうず）」と呼ばれていた。時計と同じく時を告げるアイテムである釣鐘の釣り手が古くはそう呼ばれていたのと、釣鐘の装飾として竜があしらわれていたところからきているという。奥日光の「竜頭の滝」は、何段にもわたる水の落下が竜の頭に似ているためらしい。竜は訓読みで「たつ」、つまり「立つ」であり、「身を立てる」につながる

るとも考えられた。「鯉の滝登り」は立身出世の比喻であるが、「滝」は竜が形状となった水を意味している。そこから、「立ち上る」「駆け上がる」意味にも転じたのだろう。旧日本海軍には「飛竜」、「蒼竜」という空母があったが、水を住处とし、自由闊達に動き回る竜にあやかろうとしたのだろうか。ただいずれもミッドウェイで撃沈され、それが敗戦への序曲となってしまった。「飛竜」は戦闘機にも名を残しており、こちらは水中から空へと駆け上がる竜の飛翔をイメージして名付けられた。「竜宮城」も水との関係が深い楽園を意味している。また、竜は仏法護持の神将でもある。風水の四神相応図で東方に配置されている「青竜」は、水を司る守護神獣とされていた。神社の祠に祭られている竜神様は雨乞いの土着信仰の名残であるが、竜が天をめがけて飛び立つときに風雨を伴うことに由来している。中島みゆきの『銀の竜（原題は「龍」）の背に乗って』には、命の砂漠に雨雲の渦を届けてほしいとの一節がある。きっと現代人の心の渇きをいやす役割、願いが竜に託されているのだろう。方角で言うと「辰巳」は南東にあたり、江戸では富岡八幡宮のある深川がこの方位に当たり、ここも水と深く結びついた地勢となっている。深川一帯は明暦の大火（1657年）以降市街地拡充のため新たに干拓された埋め立て地であり、ご府内の東方の要となった。「芸は売っても色は売らない」は深川辰巳芸者の心意気を表した言葉であるが、これも竜の勇猛さに通じる言い回しと言えよう。歌川広重の「名所江戸百景」では深川・木場の川並衆（筏を組んで材木を運ぶ職人、もとは蜂須賀小六など西美濃の国衆を指しており、秀吉の出世街道の端緒となった墨俣一夜城築城も彼らの技術に負うところ大である）が降りしきる雪の中、蓑を纏って川を漕ぎ進んでゆく情景が描かれている。川並衆の気風の良さは代々語り伝えられ、伝統芸の角乗りは今でも下町の風物詩となっている。

2.

閑話休題一竜が出てくることわざを調べてみると、四字熟語だけでも「**竜驤虎視**」（権勢えを得て世の中をにらみわたすこと）「**竜攘虎搏**」（力のある者同士が熾烈な戦いを繰り広げること）「**竜潭虎穴**」（非常に危険な場所）「**竜頭蛇尾**」（最初は勢いがあっても終わりは振るわなくなること）「**竜蟠虎居**」（ある土地や場所を占めて権勢をふるうこと）と枚挙にいとまがない。多くは「虎」との組み合わせで用いられていることが興味を引く。地上で覇を唱えるのが虎ならば、水中、天界は竜の支配する世界と、お互いに縄張りをすみ分けていることがわかる。いずれにしても竜は最強の存在として、古くから崇められてきた。他の竜ことわざを辞典で拾ってみると、「**竜の水（翼）を得るごとし**」（勢いのあるものにさらに拍車がかかること）「**竜は一寸にして昇天の気あり**」（優れた人物は幼いころから他のものとは違うこと、「梅檀は双葉より芳し」）、「**竜馬のつまずき**」（才能のあるものも時には失敗すること、「弘法も筆の誤り」）、「**竜門の滝登り**」（出世すること）、「**人中の竜**」（非凡な人のこと）、「**竜虎相打つ**」（強い者同士の激突、強豪対決）、「**竜の髭を蟻が狙う**」（無謀な試み）、「**竜の髭を撫で、虎の尾を踏む**」（危険を顧みないこと）、「**竜と心得た蛙子**」（親の欲目からくる見込み違い、親バカ）、「**竜の顎の球を取る**」（目標達成のために大胆に危険を冒すこと）、などがある。いずれをとっても、竜は「縁起の良さ」「絶大な力」「強運」を体現した存在とみなされていることがわかる。アジアの他の地域に目を向けると「**竜の欲する青き水は、いつか尽きる**」（栄枯盛衰の意味・西夏）「**どぶ川から竜が出る**」（竜は大河から昇天し、どぶ川には住まない、「枯れ木に花」「掃き溜めに鶴」と同意・朝鮮）「**竜も浅**

瀬に来ればエビにからかわれる」(所を得なければ、強者も弱者に愚弄されることがある・中国)「魚の頭を叩いたのに、竜の頭が揺れる」(よくない話はすぐに響き渡る・ラオス)などが『世界ことわざ大辞典』(大修館書店)で検索できる。強者のイメージもさることながら、ここでも竜と水との親和性が窺われる。水は氾濫すると人間に災害をもたらす脅威となる一方、豊穡をもたらす恩恵として神聖視され、東アジアの大勢を占める農耕の民にとって絶対不可欠な要素だったのである。彼らにとって水の象徴である竜は古来より信仰の対象となっており、民族舞踊などにも数多く取り込まれている。中国では竜が絶対的な力を保持する皇帝の象徴ともなっている。(皇帝が纏う壮麗な衣服は「竜袍」と呼ばれる)このように、東洋では畏怖すべき存在であると同時に恵みの神でもあり、総体的にポジティブに表現されていることが見て取れる。

しかし、西洋では少し見方が異なる。ドイツ語で竜は **Drache** (英語の **Dragon**) というが、その語源は「鋭い目つきの動物」という意味である。相手ににらみを利かせる目的で、古代ローマの軍旗にその姿が描かれ、それがゲルマンの世界でも継承され、紋章学にも導入された。中世の時代には悪魔の象徴となり、さらに時代が下って大砲の名前にも付され、脅威の代名詞となった。**Drache** のつく言葉を独和辞典で調べてみると、**Drachenballon** (風式気球)、**Drachenbaum** (竜血樹)、**Drachenblut** (竜の血)、**Drachenfels** (ドラッヘンフェルス山)、**Drachenfliegen** (ハンググライディング)、**Drachenfutter** (手土産)、**Drachenkopf** (竜の頭、武者竜胆属の植物、フサカサゴ科の魚、中世建築の桶嘴)、**Drachenröschen** (海天狗)、**Drachensaat** (竜の牙、不和の種) ……と相当数記載されている。気球、ハンググライダーが竜に見立てられているのは、宇宙空間をゆったりと遊泳する「白竜」と同じ発想からであろうか。また、竜の血は、それを浴びると不死身になると信じられていた。ゲルマン神話の英雄ジークフリートが竜を退治したと伝えられ、山の名前にもなっているのがドラッヘンフェルス(意味は「竜の岩」、標高 324 メートル)だ。西洋の教会の雨樋に竜が象られているのは、キリスト教の力が異教を屈服させた証とされている。父親の帰宅が遅いときに妻に持って帰る手土産はドラッヘンフッター(竜の餌)と呼ばれている。ここでは、竜が恐妻に喩えられている。海天狗(魚)なども異様な形相が竜に似ているところから付いた名である。そして竜の歯や牙は、人間に災難をもたらす火種とされていた。概して、西洋では竜は異形で人間を脅かし、平和を乱す存在として位置づけられ、悪魔の化身とする見方が一般的である。東洋のように縁起物として崇め奉られる対象ではない。

そもそも竜は架空の動物であり、人類を脅かす存在である蛇、鷹、豹などの姿を合わせてそのイメージが出来上がったという。西洋では竜を退治する話は数多く神話や伝説になっており、キリスト教が異教を制圧しカオス、暗闇を克服してゆく建国の歴史物語の中核に据えられている。自然との調和を図るという東洋の世界観とは異なり、その脅威を取り除くのが正義だとするキリスト教的な信条に基づくものだが、中でも竜は自然の諸悪の根源とされていたのだろう。聖書では聖ミカエル、聖ゲオルギウスの竜退治が有名であるし、前述したように中世ドイツの叙事詩『ニーベルンゲンの歌』に登場する英雄ジークフリートは竜を退治した折に返り血を浴びて不死身の身体となった。もっとも、木の葉がついた左肩だけ血を浴びることがなく、後日仇敵ハーゲンにその急所に槍を入れられて絶命することになるので、結果的には竜は不吉な前兆の小道具となっている。人類の終末に訪れる

黙示録では、この世を破滅させる魑魅魍魎として竜が飛び交う光景が描かれている。

竜は架空の存在であるがゆえにファンタジーを掻き立て、映像にも数多取り上げられている。フリッツ・ラング監督の『ニーベルンゲン』は映画に初めて竜が登場した作品であるが、サイレント時代の作品（1924年）でまだまだ特撮技術が未熟だったためか、その姿は恐ろしいというより滑稽で愛嬌があり、鈍重な動きはむしろ微笑ましいものだった。吸血鬼伝説で名高いドラキュラ伯爵（英国のブラム・ストーカーの小説で一躍有名になり、その後何度も映画化された）はルーマニア南部ワラキア地方の領主ヴラド4世（ヴラド・ツェペシュ 1431-76）がモデルとされるが、彼はオスマントルコを撃退した英雄であると同時に、敵を串刺しにした蛮行で民衆に恐れられたアンチヒーローでもある。彼の別名 **Dracula** は、**Dragon** に由来する。これも明らかに竜退治の伝説と彼の残忍な所業を考え併せての呼称であろう。アメリカでは開拓時代、インディアンがしばしば竜に見立てられ征服の対象になった歴史がある。『ゴジラ』や『ジョーズ』も、そうした「自然征服」「他者排除」の系譜に連なる映像作品とみることができる。様々な人種が集うアメリカでは、時に人々が団結するためにこの類の悪役はスケープゴートとして不可欠な必要悪であったし、それが「アメリカ建国神話」を担うハリウッド映画の基本コンセプトともなっている。

このように物語や映画では竜やそのヴァリエーションが頻繁に登場するが、多くは悪玉の役割を与えられている。そしてことわざとなると、西洋では竜に因んだものは極めて少ない。定着したことわざ以外では、ドイツ語に若干ではあるが「竜」を使った言い回しが散見できるが、それも東洋と異なり概してネガティブな意味合いとなっている。**Der Drache hat seine Giftzähne verloren.**（竜が毒牙を抜かれる。→不安、懸念材料が減る）**Wie ein Drache auf seinen Schätzen liegen.**（竜のように財宝の上に横になる。→金銭に対する執着が強い喩え）こうした表現からは、明らかに竜が害毒、陰湿さの代名詞として捉えられていることがわかる。**Es ist noch kein Drache ins Haus geflogen.**（まだ竜が家に入り込んでいない。→幸運がやってくるには時期尚早）これは幸運というより、「毒を以て毒を制す」的なアクの強さを強調するものであろうか。ドイツの作家ホフマンスタール（1874-1929）の戯曲『影のない女』（リヒャルト・シュトラウスが曲をつけオペラにもなった）には、**Schlimmer als ein Drache, abscheulicher dem Auge, widerwärtiger der Seele ist ein Mensch.**「竜よりも意地悪く、見た目に厭わしく、心の障りとなる者、それは人間」という一節がある。まさに、「邪悪な存在、ここに極まれり」であり、ここまで言われると竜も立つ瀬がないであろう。

3.

竜をめぐる東西の言葉や言い回しを探訪してきたが、竜ことわざで私が個人的に一番好きなのは「**画竜点睛を欠く**」である。禅宗の寺院では、襖絵や天井画に竜の姿がよく描かれている。中でも京都・妙心寺法堂の八方睨みの雲竜図の天井画は有名で、ここを訪れる者を一種異様な緊張感で包み込む。私も一度だけこの空間に足を運んだことがあるが、得も言われぬ迫力に圧倒されその場に立ち竦んだ記憶が今でも鮮明に残っている。どの場所に身を置いても、その鋭い眼光に射すくめられてしまうのである。つまり、天井画のパワーの源泉は、まさに最後に描き入れる目力なのである。「画竜点睛」が禅宗寺院の天井画に由来しているわけではないようだが、このことわざは「仏作って魂を入れず」とほぼ同義で、

物事の最終段階の重要性を説いたものである。もともとは中国南北朝時代の画家・張僧繇が、梁（南朝）の武帝に安寧寺の壁画を依頼されたときの故事にちなんだコトワザとされている。だからこのことわざのルーツは日本ではない。ただ、いずれにしても宗教的な背景から生まれた教訓ということでは、日本の禅寺に描かれた竜と相通じるものがあることは確かだ。一般論として、天井画を描くにあたって絵師がもっとも腐心するのが最後に入れる目の部分だという。仕上げの目の描き方一つによって全体像が決まり、威圧的にも陳腐なものにもなるらしい。その際求められるのは絵画の熟練した技術というより、世俗を超越した心のありようだという。その境地には一朝一夕にたどり着けるわけではない。日々の精進の積み重ねがあつて初めて到達できるのである。他の部分がいくら精緻に描かれていても、最後の詰めを誤るとそれまでの努力が水の泡になるのだ。「終わり良ければ総て良し」とまではいわないが、物事は最後が肝心だというわけだ。

実はこのコトワザには、もう一つ別の側面を物語る逸話がある。張僧繇は、四頭のうち二頭の竜に目が描かれていないことを非難されると、「残りの竜に目を入れると、竜は絵から飛び出してしまう」と警告したが、結局は聞き入れられず目を入れることになった。するとたちまち雷鳴がとどろき、激しい風雨とともに竜が飛び去ってしまったという。これは、最後の一筆如何によってそれまでの努力が水泡に帰するだけでなく、未曾有の危難をも招いてしまうことを意味している。張僧繇に壁画を依頼した武帝（蕭衍 464-549）は、南北朝時代は言うに及ばず、中国史上を通じても屈指の名君の一人であり、文武両道に秀で人間的な魅力に富んだ人物である。彼は相次ぐ易姓革命によって短命に終わったこの時代にしては珍しく安定した王朝を築き、在位は四十八年に及び、八十四歳まで生き長らえることになる。彼も先例にもれず、皇帝の座に上ると前王朝の親戚縁者を殺戮し尽くしたが、その償いの気持ちもあつてか仏教を手厚く保護し、都の建康に「南朝四百八十寺」（晩唐の詩人杜牧の「江南の春」の一節として有名）と謳われる数多の寺院を造営した。文化事業も奨励し、彼の長男の蕭統（昭明太子）は詩集『文選』を編んだことで知られている。また官制改革や政治改革などにも努め、その多くは後世の手本となった。たとえば、それまでの門閥中心の人材登用法である九品中正を実力重視の視点から見直したことが代表的な功績として挙げられるが、これは科举制度の礎を築いたものとして高く評価されている。ところが、この武帝の栄光に包まれた生涯は最晩年になって急転直下、奈落の底に沈みこんでしまうのである。何を血迷ったのか宿敵の東魏（北朝）から逃れてきた武将・侯景の投降を受け入れてしまい、その結果彼が率いる反乱軍に王宮を占領され、果ては援軍として駆け付けたはずの息子や孫たちにも見限られ、虜囚同然の悲惨な状況に置かれて餓死するのである。武帝の「画竜点睛」は、疫病神の侯景を領内にかくまったことである。「猛獣使いは往々にして猛獣に殺される」という言葉があるが、最後に目を入れた竜が大暴れして、武帝を破滅へと導いたのである。老齢で洞察力が低下したためか、一番大事なところでの確な決断ができなかったことが文字通り命取りになってしまった。「事実は小説よりも奇なり」とはよく言ったものだ。因果応報の運命のめぐりあわせか、武帝の最期は皮肉にも「画竜点睛」をネガティブに地で行く形となっている。

武帝をめぐるこのことわざのエピソードに心ひかれた私は、引き続きドイツ語で「画竜点睛」に似た表現を調べてみることにした。物事は最後が一番肝心だという意味では、*Ende gut, alles gut.*（終わりよければすべてよし）*Die letzten Gedanken sind die besten.*（最

後の考えが最良の考え。) **Wer zuletzt laht, lacht am besten.** (最後に笑うものが最も良い笑いをする。) などがあり、洋の東西を問わず締めの大切さが普遍的な教訓となっていることがわかる。**Die ersten Pflanzen sind immer madig.** (最初の李は虫食いだらけである。最初の試みは大した価値がない。) **Die Schwierigkeiten wachsen, je näher man dem Ziele kommt.** (目的に近づくほど困難は増大する。ゲーテ) も同様に、最後の重要性、油断の戒めを説いたものである。しかし、ことわざの特徴かもしれないが、**Aller Anfang ist schwer.** (すべて始めは難しい。) **Der Schritt über die Schwelle ist die schwerste.** (踏み出しが一番難しい。) のように「逆もまた真なり」で、最初が肝心だとしているものも見受けられる。少し頭をひねりたくなるが、最初にせよ最後にせよ物事は節目が一番大切だという事であろう。航行に喩えると、水平飛行の前後の離陸と着陸の状況と似ている。いずれも難しい舵取りを迫られ、一つ間違えば大惨事に繋がってしまう。それほど、新しいことを始めるには注意を要するし、終えるのはそれ以上の覚悟が求められる。取っ掛かりでは無意識のうちに人は慎重になるものだが、案外と締めくくりの方では無防備になりがちである。「画竜点睛」は、その部分に最大の注意喚起を促すことわざとも解釈できる。進学、就職、結婚など、誰しもが人生の入り口の青春期では数々の試練に直面する。莫大なエネルギーがそこに傾注されることは間違いない。一方、人生の表舞台から退場する際は大きな努力をしなくても順調に事が運ぶように思えるが、実はそれ相応の困難が伴うものである。ひょっとすれば、退場した後の方がもっと大変かもしれない。「画竜点睛」は人生の出口での心がけを論ずることわざでもあるだろう。

思うに、幼少期の人生のありようは、親に保護され他力本願に委ねられている。青年期から壮年期にかけては、自力で何事かを成し遂げたと思っている、実のところ周囲の力や人間関係に負うところが大きい。自分なりの生き方を貫いているように思えても、その内実は他者の評価や言動に左右されている場合がほとんどである。それに対し、定年後は自力で人生のルールを敷いていかなければならない。ある意味、本当の自分の始まりともいえる。程度の個人差はあれ、現役時代というのは何かにつけ社会的制約に縛られて自分のあるべき姿は見えず、「らしい」生き方や人生の実存的な真理からは切り離されているものである。職場の第一線から退き、組織や社会から少し距離を置き、一人になる機会が多い老境に至って初めて本当の自分を見つめ直すことができるものだろう。良い意味で孤独を深めることで、終活というより人生の仕上げができるのかもしれない。ただし、人生の最後がいつ訪れるかなど誰にもわからないし、人生の白秋期でそれまでと違う生き方を模索するなど正直なところ至難の業である。点睛を入れるタイミングは決して予測できないし、それを逸する場合がほとんどであろう。あるいは、不自然に点睛を入れようなどと考えない方が身のためともいえる。青春時代の輝かしい業績や美しい思い出も、下手に晩節を汚すことがあってはすべて台無しになってしまうというものである。逆に言えばそれまでの人生のながい体験も、老年の過ごし方、心がけによって実り豊かなものになり変わることも解釈できる。もちろん、それまで中身の無い日々を過ごして最後だけうわべを取り繕って目を入れても、それで人生に真の意味での箔が付くわけではなく、藪蛇になるだけのことである。まことに「画竜点睛」を実践するのは厄介極まりない。しかし、誰しも何らかの形でこのことわざと向き合わなければならないだろう。

結語

私にとって、これまで「画竜点睛を欠く」はどちらかと言えば縁遠いことわざであった。人生と芸術は同列に扱うことはできなかったし、私自身は芸の道を究めた巨匠でもないの、このことわざに思いを馳せることはあまりなかった。しかし、近頃では妙にこのことわざに親近感を覚えるようになった。「画竜点睛」は人生に一つの大きな区切り目を付けてくれ、老年の新境地を切り開く契機を与えてくれるように思われるからである。

この三月で私は四十年近く勤務した職場を定年退職したのだが、特任という形で大学には残り、それまでの仕事の延長線上で惰性の毎日を送っていた。年齢の節目は迎えたものの、教室へ足を運ぶ回数が半減しただけで、生活のスタイルそのものが格別変わったわけではない。何かアクションを起こさない限り自身のたどってきた人生の軌跡や展望など何も見えてくるはずもないこと、ましてや新しいものなど生まれてはこないこと、同時に定年退職で人生が完結するわけではないことが、そうした日々で痛いほどわかった。まさに、青年時代にも等しい人生最大の岐路に立たされた思いであった。当初は手をこまねいているだけで、いたずらに時間が過ぎ去ってゆくばかりであった。そこで、しばらくして自分にできる範囲で生活のリズムやそれまでのルーティンや生活環境を一新しようと試みた。新しい視点を見出すことで、一歩前に踏み出せると思ったからである。まだまだ「画竜点睛」の道のりは果てしなく遠いが、近ごろやっと光が射してきた感覚を味わえた。蓋し、「画竜点睛」とは、人によって解釈はさまざまであろうが、人生を総括し新たな角度から捉えなおす「俯瞰の構図」を獲得することではないだろうか。ただし、残念ながらのんびりと構えてはおれない。齢を重ねるということは、経験や知恵を積み重ねることかもしれないが、同時にそれを還元してゆく未来が限られたものになってゆくということでもある。悲しい言い方をすれば、「終わりののはじまり」である。それでも、自分なりの着地点を目指して努力を重ねてゆくのが人としての責務であろう。私は、最後の最後までその都度気持ちをリフレッシュし、新たな挑戦者として過ごす覚悟こそ、「画竜点睛」への道に大きな示唆を与えてくれるものと信じている。個人的には定年退職と新たな門出を迎えたのが辰年であったことも、何かの機縁であるに違いない。「画竜点睛」は、まさに老境にさしかかった自分が座右の銘とすべきコトワザなのである。

【主な参考文献】

- 『世界ことわざ大事典』 柴田武他編 大修館書店
『最新ことわざ・名言名句事典』 創元社編集部編 創元社
『すぐに役立つ四字熟語辞典』 狩野直禎監修 日本文芸社
『新明解故事ことわざ辞典』 三省堂編修所編 三省堂
『用例でわかることわざ辞典』 学研辞典編集部編 学研
『ドイツ名言事典』 池内紀他編 大修館書店
『ドイツの諺』 野本祥治著 郁文堂

Wörterbuch der Symbolik, Manfred Lurker, Kröner

Lexikon der sprichwörterlichen Redensarten, Lutz Röhrich, HERDER - Spektrum

Duden Das große Wörterbuch der deutschen Sprache, Dudenverlag

Etymologisches Wörterbuch des Deutschen, Akademie Verlag

虎は死して皮を留む 国分寺跡探訪記。歩き旅。

蟻川 剛

1. はじめに

私の生まれ育った国鉄(現 JR)中央線には、最寄りの高円寺の他に吉祥寺、国分寺というように、寺のつく駅名が間をおいて並んでいて、子どもの頃よりなじんでいました。国分寺の名も、それほど特別だとは思っていませんでした。国分寺市の学校に勤務していた時には市史の簡易版に関わり、現国分寺に発掘された完形の縄文式土器の取材に行った機会に、隣接する武蔵国分寺跡を訪れました。疎林の中に塔心礎をはじめ、幾つかの大きな礎石がありました。近くの中学校には、国分寺跡からの出土品が保存されていたり、国分尼寺の跡が調査中であつたりすることも知りました。しかし、多くの国分寺が各地に存在していたことやその規模の壮大さについては、まだ、あいまいな思いしか持っていませんでした。

2. 国分寺の所在地は、その国の中心

国分寺の存在に特に興味を深く持つようになったのは、梅の名所の水戸(以降、市、県府、国は随時省略)を目指して、春を待つ常磐線をたどる歩き旅でのことでした。茨城に入り、土浦で霞ヶ浦に触れた後、再度、高浜駅付近で霞ヶ浦の先端に触れると、鉄道は北に方向を変えました。歩いて行く道も北に向かうと、台地へと上り坂となっていきました。台地の上に来ると、石岡の駅がありました。「歴史の町 石岡」という看板が目に入りました。国道に出ると、昭和以前の時代を思わせる店構えの商店が多く見られ、これが歴史の町のことであろうと思いました。ところが、途中に国分寺跡の方向を示す表示を見つけ、それに誘われて国道から横道へ入りました。そこには、国分寺という寺があり、その敷地の中に国分寺の跡であることを確認させる幾つかの大きな礎石がありました。国分寺といえど奈良時代に遡るもので、石岡が歴史の町と呼ばれるのにふさわしかったのです。茨城といえば、その中心となる都市是水戸です。しかし、地図を見ると、石岡市内に「国府」や「府中」という町名が見られ、当時の常陸の中心であることがわかります。茨城の中心都市水戸といっても、歴史の中での様々な勢力の変遷の末、徳川時代にその地位を確立して現代に至っているにすぎません。奈良時代には、都から遠く離れていた土地ですが、海路をたどって霞ヶ浦に入り、高浜の辺りで上陸すれば台地上の石岡へ交通の便があつたのかもしれない。石岡の近くには、茨木あるいは茨城の地名があり、古代から開けていた土地だったこともうかがえました。

こうして、石岡と水戸の関係から、各地の国分寺跡というのは、当時の国の中心地であつて、今の都府県を中心である、例えば都府県庁所在地と異なっていたのではないかと考えると、その地域の歴史の変遷をより深く知ることとなり、歩き旅の興味を一層広げることとなりました。そして、歩き旅で広げる地形図の中に国分寺跡の文字を見つけると、できるだけそこに立ち寄って、その現状や周囲を目にして、思いを深めることとなりました。

相模では、海老名にあり、国分寺跡には保存調査に尽力した先人を称える碑が建てられています。静岡西部の遠江は、磐田にあり、調査と整備がよくなされていて、木々の多い静かな場所でした。そして、最寄り駅まで、地元のサッカーチームの名を付けたジュビ

ロードをたどっていくと、磐田駅内には、国分寺の象徴の七重塔のレプリカが置かれています。同様の塔のレプリカは、先の海老名駅にもありました。磐田を含む中泉と呼ばれる地域は、天竜川の東岸にあります。徳川家康が勢力を増してきた時期には、天竜川の東岸まで勢力を伸ばしましたが、同時期に駿河に進出して来た武田信玄のことを恐れて、天竜川を防壁にしようと、西岸の浜松を拠点としました。そのため、浜松がその後発展をとげて静岡西部の中心地となりました。

越前は、加賀地域を含んでいましたが、国分寺は武生にあり、その名を継いだ寺が武生の駅の近くに 있습니다。しかし、すぐ近くの大きな神社の方が人気があって、にぎわっていました。その側の国分寺の方は、ひっそりとしていました。最近、北陸新幹線が敦賀まで延伸して、越前武生という駅が新設されましたが、旧在来線とは離れていて、元からの武生の町へは訪れにくくなりました。

信濃は、上田に、播磨は、姫路に国分寺跡があり、備中は、総社にあり、塔の姿が風景とともに美しい景観を作り人気があります。豊前では、行橋と中津の間の市街地から離れた田舎らしい所にあり、豊後は、大分の郊外に、筑前は、太宰府の近くに 있습니다。

国分寺は、当時の日本の66ヶ国、2つの島の68ヶ所に造られました。現在の都府県の中には、1つの県の中に複数の国があり、それぞれに国分寺が作られたことになります。千葉では、安房の国分寺跡が館山にあり、上総は、五井に 있습니다。五井といっても内房線よりも、そこから分かれた小湊鉄道の駅に近い少し内陸部にあり、現在の五井市役所に近いというのも面白いです。調査や保存がされ、塔の心礎とともに、誇らしげに七重塔が描かれた案内板がありました。下総へは、まだ訪れていません。

三重も三つの国でできており、そのうち、伊勢と伊賀の二ヶ所を訪れました。伊勢の国分寺跡は、鈴鹿に 있습니다。調査、整備の進行中で、近くに博物館があり展示等が期待されます。伊賀は、伊賀上野の町外れで、高架道をくぐった先にありました。町の中心部は城をはじめ、松尾芭蕉、忍者、仇討などに関する観光スポットが多くてにぎわっていますが、国分寺跡まで来るとさすがにひっそりとしていました。しかし、調査はしっかりされていて、建物の配置がよくわかるようになっていました。

鹿児島は、薩摩が薩摩川内、大隅が霧島に 있습니다。薩摩の方は、建物の配置などがよくわかるように整備されていて、まだ新しくきれいに見えました。大隅の方は、住宅地ですが、住宅の散在する中の広場のような所でした。

3. 山城は、みかの原に

山城といえば、現在の京都です。長らく都の地となった平安京がありますが、国分寺が全国に造られていた時代は、平安京も長岡京もその姿を現わしていません。山城国分寺跡を目指して出発したのは、笠置駅からでした。東海道から分かれて、伊賀上野を通過して奈良へ抜けようと進んで、笠置に到達していました。笠置山といえば、後醍醐天皇が幕府に反抗して立籠り、夢告によって楠正成と目通りしたいわば聖地です。木津川の上流が側を流れ、山も迫っていて、駅前や周辺の町並みも狭い平地の中にありました。ただ、駅の出入口の近くには、往時の合戦の場面のジオラマが展示してあり、この地の歴史を示していました。笠置からは、柳生の里への道が南へと通じていますが、この時はその反対側の北へ向かって、すぐに木津川の橋を渡って対岸の道へ出ました。北岸の道路を木津川に沿って西へ向かいます。対岸には、鉄道が同じように川沿いに東西に延びています。道路と鉄

道が、川の南北を挟んで並走していることで、河の兩岸の地形の陰しさが感じられます。道は、やがて少し開けた平地に出ました。山に囲まれています、河の北岸に開けています。その中に樹々の多い所が見えてきました。そこが、山城国分寺跡でした。ところが、ポツポツと降り出してきた雨が、急に本降りとなりました。でも、にわか雨のようなので大きな木の下を見つけて、雨宿りをすることにしました。雨の止むのを待ちながら周りを見てみると、「大極殿」という字のある石柱が建っていました。大極殿というのは、国分寺にはふさわしくない名称です。実は、この地は聖武天皇が一時遷都を行った恭仁京の地でもありました。恭仁京が造営されていた時期と国分寺建立の詔の時期が重なっている、都の建物と国分寺の建物がどのように関わっていたのかは、よく知りません。

恭仁京に都が置かれたのは短い期間ですが、このあたりの風景は、その後小倉百人一首の中で、長い間伝えられています。中納言兼輔の「みかの原わきて流るるいづみ川いつみとてか恋しかるらむ」の一首です。みかの原というのが、この恭仁京、国分寺跡周辺の平地のことで、いづみ川（泉川）というのは、ここを流れている木津川の上流のことです。周りの山裾や平地の各所に、水の湧き出る所もあったことでしょう。

雨が止んで、再び西へ歩き始めました。道路は、雨と山側から流れてきた泥で少しぬかるんでいました。自動車は、すれ違えるのですが、大きなトラックが来た時には、山側に身を寄せねばなりません。笠置へ攻め寄せた幕府側の軍の難渋さが思われました。やがて、開けた土地に出て、奈良線の上粕駅に到着しました。

4. 四国の国分寺は、遍路の霊場に。そして、土佐の旅で

四国という名の通り、古来より四つの国から成り立っている、当然ながら、四つの国分寺が造られています。しかし、その四つの国分寺は、四国遍路霊場八十八ヶ所の中に、いずれもその名を連ねています。各県庁所在地から離れ、往時の建物は失われていて礎石を残すのみとなっていますが、その名をずっと引き継いで霊場となっていることには、四国の信仰の篤さを感じます。

土佐の国分寺へは、阿波の旅で大歩危小歩危の峡谷を過ぎて、吉野川の上流から高地に入った後、繁藤から改めて歩き始めました。ずっと並走してきた土讃線は、高知平野への斜面をゆっくり下るように、進路を東の土佐山田の方へ曲げながらトンネルを連ねています。少しでも楽に進めるようにと、土讃線から離れて、より南向きの進路をとり国道に行くことにしました。間もなく、最後の峠を越えて、道は下り坂になってきました。そして、前方に広い平野が見えるようになってきました。かつて、大阪から和歌山へ入った時、県境の孝子峠を越えて紀の川へ下って行くと、はるかに和歌山臨海製鉄所の高炉の巨大な姿など、そこに大きな都市の存在を見ました。それは、峠のむこうに、新しい一つの国が出現したような感じでした。山の多い日本を旅していると、山のむこうに新しい土地が現われることが度々ありました。この高知平野の広がりを目にした時、ここにもまた違う世界があったのだという感じでした。

下って来た道も、やがて坂がゆるやかな平らになってきました。そして、道の駅に着きました。その道の駅を過ぎると、「紀氏邸跡」という標識があり、歩いてきた国道から左へ入る道を指していました。紀氏というのは、『土佐日記』を著した紀貫之のことに違いありません。土佐の国府の仕事を終えて、都へ海路等で帰還する次第を著したのが『土佐日記』という古典です。そこで、この標識の指す方向に進めば国分寺へも行けるものと考え、進

路を左の道にとりました。

しばらく進むと、樹木の集まりとともに石の柱が多数目に入りました。近づいて行くと、石の柱に見えたのは、背丈を超えるような石碑でした。正に林立しているという感じで、たくさんの石碑が建てられていました。一つ一つ読むわけにはいきませんが、紀氏邸跡を訪れた文人たちの記念の碑でしょう。高浜虚子も土佐日記を懐にして土佐を旅したように、文人達にとって、この紀貫之のゆかりの場所は、憧れの地であり続けていたのでしょう。さらに、隣接したところに小さな公園ができていて、その内には、曲水の宴を思い浮かばせる小さな流れも造られていました。

紀氏邸跡を離れると、近くの草の生えている空き地の前に立札が差してありました。そこに書いてある文字を読んでも「国府推定地」そして「調査中」とありました。国府に仕事にやって来た一人の役人の紀貫之の邸の跡が、あれほど大きく扱われているのに、国府の扱われ方の違いに、「軒を貸して、母屋を取られる」という言葉を思い出しました。その後、近くにある国分寺へと向かいました。途中の畦道には、お遍路を導く標識もありました。そして、日の傾く中を高知の市街地へと急ぎました。

5. 新幹線から見える国分寺跡

これまで、国分寺跡が県庁所在地をはじめとした大きめの町から外れて、訪れにくい場所に在るというようなことを書いてきました。しかし、実は主要な鉄道である新幹線の車窓から見下ろせる国分寺跡が二ヶ所あります。気がついていませんか。

山陽線を旅して、姫路を目前にして御着駅を過ぎたところでした。御着駅から国道へ出て進んだ後、またすぐに国道から入ると播摩国分寺跡があります。建物は何も残ってはいませんが、よく整備されていて、平らになった場所に建物の位置がよくわかるように白っぽい石などが敷いてあるので、国分寺の大きさを知ることができます。少し目を上げると、新幹線の高架線がずっとのびています。

新幹線に乗って東京方面から姫路駅に近づいて来た時、進行方向の右側の車窓から播摩国分寺跡を見ることができます。姫路城の見える方向と同じです。姫路駅に着く手前の市川にさしかかるその少し前です。姫路駅にむけて少しスピードを落としているかもしれません。広く平らに整地された区画に、白い地の上に建物があつたことを示すように石が敷かれて区画を示していることを見てとることができます。

もう一ヶ所は、薩摩国分寺跡です。九州鹿児島県に入ってから南下を続け、川内に向けて海岸から内陸へと入ってきました。川内の中心部の手前の川内川を渡る前に寄りました。歩いてきた国道を離れて、おれんじ鉄道を渡り国分寺町という町並に入りました。そして、その家並を抜けて広場に出ました。斜面のような所に、国分寺跡があります。建物跡は調査されて、周囲を含めて公園として整備されています。そして、ここでも側に新幹線の高架を見ることができます。新幹線の建設を機に国分寺跡も整備されたのかもしれませんが。

九州新幹線の鹿児島中央駅を出発して、次の駅が川内です。川内駅を出発して北へ向かう左側の車窓です。新幹線が川内駅を出るとすぐに川内川を渡ります。そして、対岸の斜面に渡ってすぐの左側に開けた公園のようなものが見えます。その中に薩摩国分寺跡を見下ろすことができます。

もう一つ、新幹線ではありませんが、国分寺跡のすぐ近くを通るどころか、国分寺跡を横切るように鉄道が通っている所があります。それは、しなの鉄道（旧信越本線）が通っ

てしまっている信濃国分寺跡です。上田のすぐ近くで、近年、信濃国分寺駅が造られて、鉄道で訪れることも便利になりました。初めて訪れた時、国分寺跡を見学していると、急に近くを通過する列車の音に驚きました。なんと鉄道が、国分寺跡の伽藍の敷地の中を通っています。奈良の平城宮跡の一角を近鉄が通って行くのとは、比べることなどできません。もう、鉄道の部分の調査や復元などは不可能でしょう。調べると、この国分寺跡の史跡指定は、昭和初期です。それ以前に鉄道が造られたのでしょうから仕方ありません。

ただ、しなの鉄道に乗って当地を通っても、この国分寺跡をつぶさに見ることはできません。なぜなら、鉄道は、地面から掘り下げられた所を通っているからで、塔跡のすぐ足元を通っていても、車窓からはその付近の土の面しか見えません。一方、調査が進み、寺の全容が整備され、鉄道をくぐる通路もできて、全体を見て回ることができます。

6. 北の国分寺の地は、今も東北地方の中心

聖武天皇の時代、朝廷の勢力が及んだ最も北の地は陸奥で、陸奥国分寺跡は仙台にあります。それも市域の中心に近い若林区で、仙台駅から見ると東側になりますが、駅からの距離で言うと、西の青葉城と同じぐらいの所に国分寺跡があります。地下鉄で行っても、仙台駅から2つ目と3つ目の駅の間ぐらいの近さです。ビル街ではありませんが、寺町に近く、住宅の多い地域になっています。以前に行った時には、広い場所が跡地であるとして、囲まれて草がたくさん生えている広場のようでした。しかし、最近では整備されて、国分寺跡を知るガイダンス施設も造られています。

地図でこの国分寺跡の遠からぬ所、隣接した市の多賀城には、東北地方全体の経営の拠点となった国府多賀城跡が見てとれます。このようにして、国府多賀城から国分寺、大藩の伊達氏の城下町、そして県庁所在地となり、現在では東北地方第一の大都市で東北全体の中心地へと発展してきました。このように、歴史を順調に重ねてきた仙台の地は、様々な利点を有していた恵まれた土地であったのでしょうか。

7. 復活するか、安芸西条、東広島

広島尾道あたりで、瀬戸内海の風景を存分に楽しみながら進んできた旅路も、三原のあたりから海に別れを告げて、山陽本線に沿った道路も内陸に向けて進路を振って行きました。そして、本郷駅まで達したところで一考しました。鉄道は、それまで沼田川という川に沿って走っていて、更にその上流へと流れを遡るように北進します。その先は、川の流れに合わせて、屈曲を繰り返して進んでいます。鉄道を建設する際の当時の政策から、海岸部を避けて内陸部を通すということがあったのでしょうか。旅を続けるには、それまでのようになるべく鉄道に沿った道を進むことを考えましたが、地形図をながめてみると、川の流れと鉄道とともに何度も左右に振れる道は、いかにも道のりが長く、あまり良い風景も期待できません。次の目標は、東広島西条の町です。その町は、本郷駅から見るとほぼ西にまっすぐの方向に当たります。北へまわり込む鉄道沿いのルートは、とても遠まわりに見えました。そして、西に進んで西条に直行するルートは、国道2号線が走っているので、それに従えば、迷うことはないでしょう。ただ目標となる西条で鉄道に合流することはできますが、それまでの長い道のりの間は、歩き旅の「頼みの綱」となる交通機関がありません。

いよいよ、時を経て新幹線と山陽本線を乗り継いで、再び本郷駅へとやって来ました。そして、西条へ直行する西進のルートを選択して歩き始めました。駅を出て川を渡ると、

すぐに山に挟まれた土地を通るようになりました。はじめは、大きくて自動車の交通量が多い国道を避けるように、側を通っている道を選んで行きましたが、やがて谷が狭くなって国道一本だけしか通れなくなるようになり、仕方なく国道を歩くこともありました。竹原方面からの道路が合流する所から、また少し山あいの土地が開け、集落をたどって道が続きました。すると途中に、歩いている道が「田万里往還」という昔からの道であることを説明する案内板がありました。そういえば、国道を避けて脇道をたどると、沿道の家屋や土地の風景は、旧道という雰囲気が十分ありました。北の斜面の上の方から、時間をおいて轟音が通り過ぎます。しばらくその方向を見ていると、現われた正体は新幹線でした。三原駅から西進した山陽新幹線は、山陽本線をものともせず、西へ直進していました。ただ、国道の通っている地面でなく、かなり高い場所にトンネルを掘って通って行きます。そして、山ひだのつごうで、トンネルとトンネルの間に姿を見せてしまい、下方までその通過音を時々響かせてしまうのです。新幹線という新しい鉄道の建設に当たって、在来の鉄道のルートではなく、旧道のルートを選んだということは面白いと思いました。それ程旧道のルートに合理的なところがあつたのかもしれない。また、後日、山陽新幹線を利用してこのあたりを通過するたびに、トンネルの間で見下ろす風景は、自動車が行き交う国道が伸びていて、そこを歩いて通ったのだと、いつも懐かしくなります。

さて、田万里往還と呼ばれる旧道が、高地を一つ越えると盆地のような開けた土地が目の前に広がっています。まだ見えませんが、西条の町が近づいてきました。盆地の北辺の山裾に続く平坦な道をたどっていると、今度は足下に轟音が聞こえました。足元付近の下の方のトンネルから新幹線が走り出てきました。歩いてきた道が高度を上げてきたのか、新幹線が下がってきたのか、盆地の上を伸びていく線路の先には、東広島駅が見えました。山裾をまわるように道を進めて行くと、西条の町へと入って行きました。

西条の町は、今では酒と酒蔵の町として名高くなっています。酒屋や酒蔵の並ぶ一角に入ると、観光客も見られました。しかし、目当ては、この町にある安芸国分寺跡です。酒蔵の町を通り抜け、更に山陽本線をくぐって行くと、国分寺という寺がありました。旧国分寺跡としては、鉄の柵に囲まれた礎石を見ることができました。駅の周辺や観光客のいた町並から少し外れて、国分寺跡周辺はひっそりとしていました。そして、西条駅に向かい、ようやく山陽本線に合流を果たしました。

歩いて来たルートと山陽本線に挟まれた高地には、手狭になった広島市内から空港が移って来て、新しい広島空港が造られています。山陽新幹線の東広島駅も、その前からあります。そして、近年になって同じく広島から、広島大学の幾つもの学部が移転して来ました。空港、新幹線、大学が集まって来た東広島西条近辺は、かつて国分寺が造られた安芸の中心であった頃の勢いを復活させることも考えられないでしょうか。

8. 偶然でしょうか

冒頭で書いた JR 中央線の国分寺駅の隣は、武蔵小金井駅です。こんなことは、子どもの頃から親しんでいて、何ということもありませんでした。そして、社会人になってから、JR 宇都宮線に小金井行という列車があるのを見て、元祖の小金井駅というのが、そこらへんにあるのだなとその時はそう思うだけでした。

ところが、その後、大変なことに気づきました。下野国分寺跡の最寄り駅が、数 km 離れたこの小金井駅なのです。国分寺駅の隣が武蔵小金井駅であるように、小金井駅の隣に国

分寺の名の付いた駅はありませんが、ごく近くに国分寺（跡）があるのです。これは、偶然でしょうか。ただ JR の駅名などから推測しただけなのですが、国分寺と小金井という名称、あるいは地名には、関係があるのでしょうか。二つの名がセットになっている、という何かの謂があるのでしょうか。まだ、何の確証も得ていません。時折思い出したように地形図を取り出して、各国分寺跡の近辺に小金井あるいはそれに類する地名は無いかと、ながめてみるのですが、未だにその徴候を見出すことはできません。いつか、三つ目の例が見つからないかと楽しみにしています。

閑話です。最北の国分寺跡のある地が宮城の仙台で、最南の国分寺跡のある地が鹿児島
の薩摩川内です。なんと、この仙台と川内という地名の読みは、どちらも「せんだい」で
同じなのです。でも、これは偶然以外の何ものでもありません。

9. おわりに

私の関ってきた小学校の社会の学習では、聖武天皇の時代の仏教のことについて、奈良
東大寺の毘盧遮那仏（大仏）を取り上げます。その金銅仏とそれを納める大仏殿の巨大さ
に誰もが驚嘆し、興味を深めます。そして、同時に行われた国分寺、国分尼寺の建立は、
付け足しのように扱われ、一ヶ所の例も取り上げられず、次の時代の学習へと進んで行っ
てしまいます。東大寺の大仏と大仏殿には、その巨大さだけでなく、改修を繰り返して
きたとはいえ、現在でも実際に目にする実在感という強みがあります。「虎は死して皮を残
す」ではありませんが、一方の国分寺はといえば建物は無く、今は礎石しか見ることがで
きません。

しかし、旅をして訪れてみると、南東北地方から四国九州地方に渡って、限なく六十余
りの国に国分寺が建立されていたという事実を知ることができます。その国分寺や国分尼
寺の規模は、現在の寺院からみてあなどれるものではありません。そして、それぞれの伽
藍には、どれも今では多分どこにも見られない七重塔がそびえていたのです。総本山の
東大寺の立派さはさることながら、全国各地に大規模な寺院が造営され、高塔が建てられ
たということは、比類なき国家の大事業であったと言うしかありません。国内の各地にそ
うした風景が見られたのは、さぞ壮観であったと想像します。

現在では、インターネットで、各地の国分寺跡の様子を知ることができます。それによ
ると、年々調査研究が進んで、文化財として活用しようと、ビジターセンターや資料館な
どの施設も造られているようです。地元では、その歴史的な価値の重要さを広めようと
しています。国分寺跡の整備は、各地で着々と進んでいます。まだ国分寺を復元しよう
という話は、聞いていません。もし、復元するということになっても、かつて観光目的を含
んだような「城」が次々と建てられるような安易なものではなく、歴史的で文化財的な価
値を重んじたものであってほしいものです。

いつか、かつて国分寺があった地に、レプリカなどではない国分寺の象徴ともいえる七
重塔が復元され、高くそびえる姿を見たいと思っています。（終）

法螺ことわざの復権を！ ―嘘ことわざ諸々―

時田 昌瑞

<主な嘘ことわざの流れ>

嘘に関することわざについて小文を書かなければならない機会があり、その準備のために該当することわざを少し調べてみた。

大きな辞典の索引で項目数をみると、嘘つき、嘘八百などの関連する語句をふくめると約 100 ある。見たことも聞いたこともないようなものも混じっているので、手始めに現代よく使われているものから見ていきたい。私が調べた戦後に使われたことわざの総数は約 4 万 2000 であるが、その中で使用された嘘のことわざを数の多い順にあげると、○嘘も方便 (34 例) ○嘘つきは泥棒の始まり (31 例) ○嘘から出た真 (22 例) ○嘘をつく と閻魔様に舌を抜かれる (12 例) ○嘘八百 (10 例) の 5 つが複数回以上用いられたもので後は 1 回のみでの使用にとどまっている。その 1 回こっきりのものもわずかに 8 点にすぎないから、戦後の嘘のことわざは総体からすると項目といい、使用例数もかなり限定されたものといえるようだ。蛇足だが、常用のことわざは自分で独自に決めた 30 例を基準にしているので 34 例の「嘘も方便」の戦後ランキングは 343 位、31 例の「うそつきは泥棒の始まり」が 377 位となる。

核心の議論に入る前に上掲の 5 つのことわざの歴史的な歩みについて簡単に触れておきたい。一番使用例の多い「嘘も方便」の早い例は、安土桃山時代から江戸初期の医師・江村専斎の逸話集『老人雑話』に「仏の嘘をば方便という、武士の嘘をば武略という」との形で出てくる。これに続いて 1767 年の『世間妾形気』巻三に「方便の空言は釈迦のおゆるし」とある。どちらも、ことわざそのものの形ではないが、ことわざの先行のものとしてわざと踏まえたものといえる。江戸期では全体でわずか 7 点に過ぎず、多用されたものではなかった。明治期でもさしたる違いはなく 11 例にとどまるものであり、戦後になって常用の基準値である 30 を超える 34 例までに増えている。「嘘も方便」との言い回しも幕末にでてくるものの、一般化したのは戦後になってからに過ぎないことから、周知のことわざとなった歴史は古いものではないといえる。ちなみに、自分との関係について言えば、はっきりはしないが、大人になってから知ったのだと思う。

つぎに多い「嘘つきは泥棒の始まり」は、江戸期では「嘘は盗みの基」「嘘は盗みの手本」とあり、明治期になって「嘘は泥棒の始まり」「嘘は盗人の始まり」「嘘をつく と泥棒になる」「嘘を吐く者は泥棒のはじまり」等ともいわれた。同時に現代と同じ「嘘つきは泥棒の始まり」も 2 例みられ、全体で 10 例を確認している。戦後は「嘘つきは泥棒の始まり」の言い回しにほぼ収斂され 31 例と増加し、常用の仲間入りとなっている。なお、このことわざは昭和 30・40 年代ころは、幼い子供が幼稚園で学ぶ初めてのことわざだといわれていたものだ。

つぎの「嘘から出た真」は江戸中期ころからみられ江戸期だけでも 37 例あるように江戸期ですでに常用されたことわざだ。明治期も 32 例みられ江戸期に引き続き常用されていたが、戦後になると 22 例と少し減少したものの、全体的には時代を超えて親しまれていたことが窺える。特に女郎の嘘をカルタの絵にした江戸系いろはカルタに採られていたので実

際の使用例数より知られていたかも知れない。

4 番目の「嘘をつく」と閻魔様に舌を抜かれる」には、江戸期に「うそをいうた者は舌を抜かれる」「嘘をつく」と閻魔に舌を抜かれる」「偽りをいえば鬼にべろを抜かれる」の少し言い回しが異なる 3 点がある。このなかで一番古いものは「うそをいうた者は舌を抜かれる」と考えられる。狂言『柱杖』など 3 点の狂言作品にみられるからだ。江戸期の使用例数は 11 例だが、これまで知られていなかった「偽りをいえば鬼にべろを抜かれる」には注目したい。嘘の代わりに偽り、閻魔の代わりに鬼が用いられた大きく異なるバリエーションになっているからだ。明治期は鬼に舌を抜かれるの形も 2 例あるものの、「嘘をつく」と閻魔様に舌を抜かれる」が主流となり全体で 12 例を数える。戦後は明治期の流れをそのまま受け継ぐように 12 例の同数が確認できている。自分の幼いころは、祖母から聞かされたこの閻魔様の恐ろしいことわざが強く印象に残っている。

5 番目の「うそ八百」は江戸初期からみられ江戸期に 60 例使われている。明治期も 45 例でてきているものの、戦後になると 10 例と激減している。時代が下るに従い使用度合いが減少した例といえる。自分との関りでは、老境に達した現在こそ使うものの、それまでは使った記憶はない。

<嘘ことわざの分類>

嘘に関することわざは「嘘も方便」のように嘘を否定しないものもあるが、「嘘つきは泥棒の始まり」のように多くは否定的にみている。ここでは多数派となる否定的なものを除いた上で、嘘に対する見方や態度に関する主なものを分類し概観してみたい。

まずは積極的な肯定派とでもいえるものから取り上げたい。ここには、○嘘は日本の宝 ○嘘は世の宝 ○嘘は渡世の秘宝 ○嘘も身の芸（上手に嘘がつけるのはその人の芸といえるもの） ○嘘も誠も話の手管（話を面白くするには嘘も必要） ○話の名人は嘘の名人（話が上手い人はでたらめや誇張が多い）などが挙げられる。どれも明治期から大型の辞典にしか見られない珍しい言い回しだ。初めて辞典で見た時には本当にことわざなのかとにわかに信じられなかった。ことわざに誇張はつきものだから、その最たるものともいえようが、それにしても嘘が日本の宝には啞然としたものだった。

つぎが積極的ではないがやむを得ないとするものや場合によって肯定するものだ。○嘘も追従も世渡り（处世のためには嘘をつくこともへつらう事もあるということ） ○嘘も場合による（嘘はついてよい場合とよくない場合があること） ○嘘をつかねば仏になれぬ（仏は衆生を救うために嘘をつく） ○商人の嘘は神もお許し（商人が利益を得るための嘘は許される） ○嘘でなければ世が渡られぬ（うまく世渡りするには嘘は大事） ○嘘も三日はうれしい（お世辞は少しの間はうれしい）。ここでは、「嘘も三日はうれしい」が江戸後期のことわざ集『譬尽』に「虚言は三日うれしい」の言い回しででてくるものの、あとは明治期以降のもの。この多くは处世術として嘘を捉えているが、実際には許容範囲の枠か何らかの基準を設けねばならないだろう。この点を考慮しないと安易に嘘が肯定されかねない危険性がある。

3 番目が、嘘という存在自体や属性を示し表現しているもの。○嘘は後から剥げる（嘘はばれるものということ、初出は浮世草子『西鶴織留』1694 年） ○嘘にも誠あり誠にも嘘あり（完全な真実もなければ嘘もないということ） ○嘘の勘八（嘘を擬人的に表現

したもの) ○嘘つき弥次郎、藪の中で屁をひる(平気で嘘をつく者は陰で悪事をするということ、初出は読本『夢想兵衛胡蝶物語』1810年) ○傾城の胸は嘘の入れ物(遊女のことばは嘘が多いこと、浮世草子『当世傾城気質』1771年) ○講釈師見てきたような嘘をつく(講談師はあたかも自分が見てきたように仇討ちなどを語ること) ○子供と馬鹿は嘘が言えない(ずる賢くないと嘘はいえない) ○仲人の嘘七駄シダ片荷カタ(仲人は嫁入り道具が七頭の馬に載せるほどあると言うも実際はわずかしかなこと) ○世の中は嘘八分に実二分(世の中は嘘が八割でまことは二割) ○世の中は嘘、慾、恋(世の中は嘘と物欲と色欲の3つで動いている) ○嘘で固めた世の中(世の中が嘘ばかりであること)。

4番目が修辞としての嘘の存在。○嘘と坊主の頭はいったことがない(言うとは結うを掛けて面白く表現したもの) ○嘘とぼた餅はつくものではない(餅を衝くに嘘をつくを掛けて表現) ○嘘を築地の御門跡ゴモセ(江戸の地名である築地にあった西本願寺の別院に掛けた洒落表現 鶴屋南北『三賀荘曾我島台』1821年) ○嘘を筑紫(九州の地名の筑紫に掛けた洒落) ○八卦八段嘘八百(易者のいうことには嘘が多いこと)。

<新たに見つかった嘘ことわざ>

長いこと用例拾いをやっていると嘘のことわざでも新しいものに出会う。ここでは、これまでの辞典に見られない<新ことわざ>と、これまで初出資料が明記されていないものを取り出してみる。

○うそは軍イサのならい：戦では嘘は決まり事だということ。敵を欺く軍略としての嘘は必要不可欠であり、むしろ当然のことなのだ。敵に勝つことを目的とする戦争では、敵を欺いた側が勝利を手にする要因となるからだ。1714年の近松門左衛門の浄瑠璃『蛾才歌加留多』第一に「うそは軍のならひぞと、直に夜討の百五十騎、堀河表の惣門に打寄せ、関ヶ原をどつとぞあげにける」とでてくる。明智光秀の「武士の嘘を武略という」考えを極めた表現かとみられ注目に値する。

○うそは乱離ウリの本ヅメ：うそは社会を乱す根本だということ。1810年の曲亭馬琴『夢想兵衛胡蝶物語』巻一に「欺詐ウリは乱離の本ヅメにして、国君欺詐ウリをつくときは、臣妾シシヨリ侮り民従わず。士庶人シシヨリ欺詐をつくときは、親族離れ朋友助けず」とでてくる。乱離とは国が乱れて人々が離散することなどで、うそが社会を根幹からダメにするとの認識が示されている。うそがもたらす否定的な意味合いをこれほど強く表現したものはないと思われる。

○虚ウリはまことの骨、まことは虚の皮：嘘と真実は体の骨と皮との関係のようなものだということ。嘘は真実を隠し、真実は嘘をあばく。これまでは明治時代の『日本俚諺大全』が早いものとされていたが、1833年式亭三馬の滑稽本『人間万事虚誕計』の自序にでてきている。

○嘘をいうと盆が来るに閻魔様へお参りができぬ：嘘をつくと罰が当たること。おそらく閻魔に舌を抜かれるを下敷きにしたものではなかろうか。樋口一葉『にごりえ』(二)に「私は何も沈んだ事は嫌ひ、さわいでさわいで騒ぎぬかうと思ひますとて手を叩いて朋輩を呼べば力ちやん大分おしめやかだねと三十女の厚化粧が来るに、おいこの娘の可愛い人は何といふ名だと突然ダシクに問はれて、はあ私はまだお名前を承りません

でしたといふ、嘘をいふと盆が来るに閻魔様へお参りができまいぞと笑へば、それだとして貴君今日お目にかかつたばかりでは御坐りませんか」とでてくる。

- 嘘をついたら木綿一反、親の眼ヲグさ針三本：嘘をついた罰は木綿一反と親の目に針を三本刺すというもの。秋田地方の歳時唄のひとつ。類句もあり、「嘘まければ、小駒コー一匹、木綿一反、親の眼ヲグさ、針千本」ともいう。昭和25年の北原白秋編『日本伝承童謡集成』第6巻に収録されているものなので、明治時代ころには歌われていたと推定される。嘘をついたら親にまで累が及ぶ日本の連帯責任の考えがうかがえて興味深い。
- 嘘から出た実は末を遂げるもの：冗談が本当になったことはとことんまで行くということ。侠客物を得意とした明治時代の大衆小説家・村上波六の『浮世車』（大正12年の波六全集第25編所収）に「貴君へ不足を持ち込むぢやア御坐いませンが、少しの無理は是非、聞いて戴きたいの、また聞いて下さる貴君でせう、諺にも嘘から出た実は末の遂げるものだと言ひますよ、決して一時の浮気ぢや御坐いませン」とでてくる。「嘘から出た実」は常用のことわざだが、これに続くものがあるとは知らなかった。余談だが、村上波六には、従来のことわざ辞典などに見られないことわざが非常に多くでてくる。私の推測だが、恐らく日本で一番多く用いた人物ではないかとみている。
- 嘘を築地の水天宮：「嘘を築地」と同じで嘘をつくことの洒落表現。明治時代の戯曲家・高安月郊『飴売土平』序幕にでてくる。「作蔵 ハハハハ イヤこれは『恐れ入り谷の鬼子母神』だ。 虎市 イヤお前さん田舎の人に似合はねえ、洒落た事を知つてゐるね。 作蔵 それは『嘘を築地の水天宮』位は知つてゐますよ」
- 嘘に尾鰭をつける：嘘をさらに誇張していること。昭和15年の太宰治『女の決闘』第二には「この手紙を書いた女は、手紙を出してしまふと直ぐに町へ行つて、銃を売る店を尋ねた。そして笑談のやうに、軽い好い拳銃を買ひたいと云つた。それから段々話し込んで、嘘に尾鰭を付けて、賭をしてゐるのだから、拳銃の打方を教へてくれと頼んだ」とでてくる。嘘の単語に尾鰭をつけるという慣用語をつけたものであるためか、違和感なく自然に読めてしまう。文筆家や小説家には自らあみ出した独創的な言い回しをしている例が時折見られるので、ことによると太宰による創作であるかもしれない。
- うそにも種がいる：嘘をつくにも本当らしくするための材料がいること。これまでは明治時代のことわざ集『俚諺大全』に収録されていたが、用例は記されていなかった。マルクス経済学で著名な河上肇の『自叙伝』幼年時代・少年時代には、このことわざを説明しているような箇所があるので引用する。「ところで二十五年を経た今日、当の環々々女子によって語られている当時の思い出は、何というでたらめの嘘八百であろう。人間というものは、こうも白々しく真赤な嘘を並べながら、平気なつらをしていられるものかと、私は全く驚くばかりである。諺には、うそにも種があると云つてあるが、この女の思い出話しには、種となるべき事実の破片すらない。」
- うそは常備薬、真実は劇薬：軽いうそは常備薬のように日常にそなえて適宜に使うものであるが、真実を言う場合は劇薬と心得ておくべきとの意。この言葉は高名なユング心理学者である河合隼雄氏がいったことば。上手にうそをつくことで人間関係を円滑にする考えが根底にあるとみられるが、曲解される恐れもある。他人を傷つけ害する嘘を平気で口にする者が残念ながらこの世の中でまかり通るのだから。このことばは2018年5月18日の毎日新聞夕刊の近藤勝重「昨今ことば事情」を読んで知った。うそに関して熟

考した河合氏による創作と考えられる。

○うそは人を見て言え：うそは相手をしっかり認識してから言えということ。作家の塩野七生氏の『男たちへ』の5章「嘘の効用について」のなかにでてくる。「彼は、キミは同性からの絶対的な支持を受ける作家になる、などとは言わず、異性である男たちを驚かせる物書きになるだろうと言ったのである。もしも彼のほめ方やおだて方が前者の方であつたならば、私とて、そうそう簡単にふるいたつ気にならなかったであろう。嘘は人を見て言え、という格言もあつたような気がするが、彼はそれを私に対して駆使したのである。そのあとも彼は、何度も嘘をついた」とでてくる。

○うそつきは、うそ一つを信じ込ませるために、本当のことを百言う：嘘をつくにも念入りの準備がいること、逆からいえば巧妙に仕組まれた嘘を見抜くのは容易ではないことになる。これは2012年10月14日の東京新聞一面コラム筆洗に載ったもので米国のことわざだ（H・P『プリマスの説教壇から生まれた諺』1870年）。iPS細胞からつくった心筋細胞を患者に移植することに成功したとの研究成果が発表され新聞記事となったものの、これが事実無根であつたことに対して用いられたことわざだ。いくつもの事実の中に紛れ込んだ嘘を見抜くのはたしかに難しい。特に事実の部分が身近なものであれば嘘の色合いが薄められてしまい隠れてしまうからだろう。かく言う私自身がいわゆるオレオレ詐欺に見事に引っかかり、身を以て体験したからだ。嘘に関することわざは色々あるものの、このようなことわざは非常に珍しい。

<法螺・空言・偽り>

嘘の意味の類語には法螺、空言、偽りがあり、そこに具体的なことわざも存在していることが分かった。嘘との関係を調べる目的のため嘘と同一と見なせるものであれば語頭に◎を記すことにする。また、用例や具体的な資料があるものは明記する。

法螺のことわざといえるのは、○法螺とラッパは大きく吹け（どのみち法螺を吹くのであればラッパのように高らかに吹けということ） ◎法螺も方便（嘘も方便に同じ、今回初めて知りびっくり仰天） ○法螺の吹き当て（おお法螺を吹いたことが偶然実現すること）の3つ。法螺を吹くということばには、ホラ貝を吹くと大言を吐くの意味がある。3つあることわざのうちラッパと方便には用例が見当たらないものの、明治時代の辞典には見られるので、明治期には存在したと推定される。

つぎに空言。○大人朴々空言言わず（年寄りの言葉に間違いはないとの意。俳諧『世話尽』1656年） ◎空言ヲゴト後から剥げる（嘘はいずればれるもの、江戸後期『診苑』。

「嘘は後から剥げる」江戸初期と同じ） ◎空言に似たる誠は言うとも誠に似たる空言は言うべからず（嘘っぽい真実はいっても真実めいた嘘はいってはいらない、江戸後期の読本『双蝶記』 「嘘らしい嘘はつくとも誠らしい嘘はつくな」と同じ） ○筑紫ツツ人空言す（筑紫の人は嘘をつく。室町時代から謡曲など） ○天子空言せず（天子は偽りをいわない。平安期『宇津保物語』） ○仲人の空言（仲人の話には嘘や誇張が多く当てにならない。江戸初期から仮名草子『尤双紙』） ◎人の空言は我が空言（人が言った嘘でも受け売りすれば自分の嘘になること、江戸初期俳諧『毛吹草』。「人の嘘は我が嘘」江戸中期と同じ） ○方便の空言は釈迦のおゆるし（方便の嘘はお釈迦様がお許しになっていること、『世間妾形気』上掲） ○巫女の虚言ヲゴト（神託と称して巫女が嘘をいうこと、俳

諧『世話尽』1656年)。

そして偽り。偽りには事実でないこととか偽のものといった意味もあるが、ここでは嘘の意味に限定する。○偽りの頭に神宿る(商人のように嘘をつく者が利を得ることがある) ④偽りは門まで(外でついた嘘も家ではバレてしまう、「嘘は門口まで」に同じ) ○偽りをいえば鬼にペロを抜かれる(うそをつくと閻魔様に舌を抜かれるに同じ) ○いにしえの愚や直、今の愚やいつわりのみ(昔の愚か者はまだ正直であったが、今の愚か者は嘘ばかりをいう、『論語』から)

以上、法螺・空言・偽りに関するものを概観してみた。この3つに嘘も合わせたうえで通覧してみて気づいたことは、①空言のものに江戸期以前のものが多いこと。②それぞれの語のことわざの総数は、嘘が飛び抜けて多いものの、他の3つはこれまで考慮されていなかったで今後はきちんとした位置付けが必要。歴史的観点からすれば嘘のことわざを追求するには、嘘に加えてここの3つも合わせて総合的に考える必要があるようだ。

<嘘ことわざの多義性>

これまで嘘に関することわざについて概観したが、いくつか問題も明らかになったのでまとめてみたい。上述したように嘘ことわざの嘘には複数の意味があることが明らかになっている。念のために嘘の意味をいくつかの国語辞典でみると、①事実でないことを本当であるかのようにだましていうことば。②間違っていて正しくないこと。③適切・適当でないこと。この3つにまとめられようが、問題となるのは抽象的な③になるだろう。この③の意味するところをさらに厳密化すれば文意に沿った解釈ができると思われる。上掲のことわざから次のようにくくれると思う。

a) 誇張とするもの：嘘に関する多くのことわざは嘘に対して否定的だが、なかにはそうではないものがある。上述したものでは「嘘は日本の宝」などとする一連のことわざがあるが、どの意味が当てはまるのだろう。強いていえば③に近いかも知れないものの、少し違うようだ。ここでの嘘は、法螺と同じ意味になる誇張が最も近いようだ。誇張の意であればことわざの解釈として齟齬感はない。誇張だと解釈すると、「法螺とラッパは大きく吹け」のことわざも腑に落ちる。余談だが、私が若い頃では法螺のラッパといえは元大映社長の永田雅一の大法螺と総評議長太田薫のアジテーションのラッパが有名だった。ある面で、日本の未来へ向かってのがむしゃらな前進を促す景気づけのようなものであった。

b) でたらめ・いい加減・軽口などと解釈できるもの：具体的には「話の名人は嘘の名人」「嘘も誠も話の手管」などが相当すると考えられる。どちらも話し方に関するものだが、ここの嘘に人をだます意は感じられず、反対に人を喜ばしたり、楽しませたりする技術といった肯定的意味が感じ取れるようだ。

空言のほうには「大人空言言わず」「天子空言せず」の2つにここの意味がみられる。

c) お世辞・おだて：<新たに見つかった嘘ことわざ>にでている「うそは人をみて言え」で使われているのは、一言でいえばおだてだ。塩野氏の文章は失礼ながらまるで「豚もおだてりゃ木に登る」を地で行ったような内容だ。たとえお世辞と分かっている気持ちはよくされれば乗ってしまうのだろう。「うそも三日はうれしい」とのことわざのうそもお世辞かおだてだ。どちらにも通じるのが嘘が肯定的に捉えられているので嘘の概念

を少し改めなければならないかも知れない。

- d) どれにも区分けできなかつたり、混交していたりするものが多い。「嘘でなければ世が渡れない」「傾城の胸は嘘の入れ物」「講釈師見てきたような嘘をつく」「世の中は嘘八分に実二分」「仲人の空言」など。

<嘘はついてもよいのか?>

ついてならないとするのがことわざの嘘に対する基本だが、なかにはついてよいとする嘘もある。その基準は、①相手に対して悪意がなく善意による場合 ②戦争のようにお互いがだましあう構図の場合 ③双方がお互いに競い、闘うもの（スポーツや武術における戦術） ④不当な攻撃からの自衛のための嘘（明智光秀の農民の例）

これを具体的なことわざに重ねて考えてみたい。①に該当するのが「嘘も方便」だ。多くの辞典の解釈は、時と場合によって嘘は許されるとしているだけで非常に曖昧だ。しかし、「仏の嘘は方便」の原意からすれば、これは利他目的の嘘を指すものであって自分の利益を計るものではない。利己目的の嘘とは区別すべきと考えている。方便として許されるのは他を利する場合に限られると考える。このあたりの具体例は前年の本誌に会員である小森さんの文章が詳しいのでご確認いただきたい。なお、小森さんへは中国革命を支援した宮崎滔天の「誠より出でたる嘘は嘘ならず」とのことばを贈りたい。

「嘘も方便」以外では、悪意がなく他人を害する恐れのないもの、たとえば「法螺とラッパは大きく吹け」のようなことわざが当てはまる。

②に関しては、明智光秀の「仏の嘘を方便、武士の嘘を武略」が該当する。嘘は立派な軍事的戦略だとの認識と解釈できる。双方の力が大差ない場合、いかに敵の裏をかくて勝利するか、武略はこれに尽きよう。嘘は最高の戦術なのだ。

③はスポーツを少しかじった人ならすぐ分かるはず。右とみせて左とか、押すとみせて引く、フェイントなど多くのスポーツや武術に共通する。ただし、これは実際の競技に限られようが…。とはいえ、スポーツの場合は試合前のトーク合戦はあるものの、大部分が行為・行動によるものでことばでの嘘ではない。ことばの嘘と同等に扱えるか思案中なのだ。試案としてご覧いただきたい。

④はなかなかの難問だ。この問題は②で書いた明智光秀の文章のつづきの中にある。そこには「土民百姓はかはゆきこと也」とでてくる。仏や武士の嘘はよくて、年貢をごまかした百姓だけが罰を受けるのはおかしく、百姓のごまかしの嘘など可愛いものだという意味になるようだ。ここの点で考えなくてはならないのが、社会における強者と弱者の関係。弱者が強者に逆らうのは簡単ではないが、金のかからない嘘などの言葉は有効な手段になるだろう。権力者などの強者から身を護る自衛のための嘘は許されると考える。ただし、それは強者が不当な強制を伴う場合などに限られよう。ただ、これは抽象論であって実際の状況に即してなされねばなるまい。

<おわりに>

悪意を抱いて他者を攻撃する嘘は厳に慎まなければなるまいが、ほらふき男爵のような夢ある愉快な笑い話のような法螺は陰湿な嘘とは対極をなす。「嘘らしい嘘はつくとも誠らしい嘘はつくな」をモットーに、楽しい法螺ことわざ（悪意性のない嘘ことわざ）を心置きなく口にできる日が来るのを待ち望んでいる。

「私家版 卓球カルタ」を創るための序章

山口 政信

はじめに

『創作ことわざ』と『スキーことわざ創り』をまとめたのは2000年のことでした。そして2004年には「創作ことわざでフルマラソンを完走する法」と題した論文において、〈マラソンいろは〉を紹介しました。前者は学生の禪で取った相撲ですが、後者は自らが42.195kmの長丁場に挑み、121回完走する過程で創った汗の結晶です。

このような事例から、「スポーツとことわざの相性はどうですか」と問われたとしたら、「とてもよいですよ」と即座に答えるでしょう。それはことわざの〈こと〉が言と事、〈わざ〉が技と業という、スポーツの根幹が押さえられているからです。

この理は、認知脳科学者の酒井邦嘉が「言語のはたらきは、『知覚-記憶-意識』という心のはたらきと関わり合いながら、脳のシステム（体系）に組み込まれている」と述べていることから理解されることでしょう。（『言語の脳科学』、2002、中央公論新社）

古来より武術の稽古や指導の過程における〈こと〉と〈わざ〉に気づき、〈術〉を見出した武人は数知れず存在していたはずで、彼らが磨いてきた心技体の在りようは、創作ことわざと称してもよい「わざ言語」や「術語」として、伝承されるべき文化です。

その諸事は奥義書などとして残されているものもありますが、「一子相伝」に基づいた「口伝」「別伝」といった内向きの世界観に阻まれ、多くの文化資産は文字化されることなく葬り去られてきたのではないかと危惧しています。

翻って現代。『スポーツことわざ小事典』（野々宮徹編著、1992、遊戯社）は、スポーツとことわざをタイトルにした、最初の事典だったように思います。また、サブタイトルではありますが、〈現象学的スポーツ学と創作ことわざ〉との文字を掲げた著作としては『スポーツに言葉を』（山口政信、2006、遊戯社）が存在します。同書にはことわざ創りの意義や創作されたことわざ/わざ言語や術語が、教育現場における教示言語や指導言葉として活用されてきたことなどが掲載されています。

以下、知るところでは、『ことわざ検定公式ガイドブック下巻（1～3級）』（時田昌瑞/山口政信監修、2012、シンコーミュージック・エンタテイメント）のなかにスポーツの見出しがあり、わずかに3ページですが伝承ことわざが紹介されています。また、近いものでは『学校で使いたいことわざ』（時田昌瑞/安藤友子監修、2017、大修館書店）があり、体育の時間や部活の見出しとともに伝承ことわざが記載されていますが、両者とも表紙にスポーツとリンクする文字は見られません。この他にも見るべき著作が存在するものと思いますが、残念ながら筆者の力がそこまでには及んでいません。

以上のような背景から、すべてのスポーツ選手に期待したいことがあります。それはことわざを学び、ことわざに学びつつ、練習とことわざ創りを同調させること、さらには創作の技法と創作ことわざを公開し、国内外に広めることです。こうすることによって、スポーツとことわざの間にウイン・ウインの関係が築かれ、さらに高いパフォーマンスが得られるものと考えています。本稿がその一助になれば幸いです。

なお、文中のことわざとカルタは、同義の言葉として使用しています。ご理解ください。

卓球あらかると

学生時代は 400m ハードル競走を専らとしてきました。当時は土のトラックだったことから、大学 1 年時には〈トラックの草は足で取れ〉と教えられたことがあります。現在ではイメージしにくいであろう教示言語/指導言葉ですが、59 年前に聞いた一言を思い出すのですから、ことわざに匹敵するインパクトがあった訳です。ことわざ/創作ことわざは覚え歌(mnemonics)や記憶術としても活かしているのです。

さて卓球です。「卓球は回転のスポーツ」「卓球は予測のスポーツ」と言われています。これが「卓球とは 100m 走をしながらチェスをするようなスポーツだ」となると、グッと趣が深くなります。この文句は〈Mr. 卓球〉こと、故荻村伊智朗氏が発した衝撃的な言葉として忘れることはできません。

質のまったく異なる競技を、〈ような〉という助動詞で取り合わせたこの言葉は、卓球ことわざとしても非の打ち所がありません。オリンピック種目にはなっていなかった時代の世界選手権大会で獲得した 12 個の金メダルや、のちに世界卓球連盟会長として残したピンポン外交をはじめとする多大な業績とともに燦然と輝いています。

異質の組み合わせといえば、かつて陸上競技の 100m 競走で五輪を制した選手が「フルマラソンでも…」と語ったことを思い出します。走る競技としては同じでも、筋肉組成や心肺機能の種目特性から見て「ありえない」と身近な人には断言していました。案の定、その後の音沙汰は「梨の礫」でした。この発言は単なるリップサービスだったのかもしれませんが、極端な事象を対比すると注目が集まるという事例にはなるでしょう。

この卓球と陸上のエピソードを土俵に上げてみると、どちらに軍配が上がるかは明確です。取り合わせた要素の質的な差異だけではなく、《事実から出た実》であることからしても、「月と鼈」と一笑に付されるのがオチのようです。

話は飛んで 2017 年。卓球教室に通い始めたのは定年を迎えた 71 歳直前のことでした。その翌年には仲間でチームを結成して定期的に練習し、試合にも出るようになりましたが、チェスで競う才覚に乏しい我が身は、負けたり勝てなかったりの連続でした。

それでも懲りずにことわざを創り、いずれはいろはカルタに仕立てようと企み、メモは欠かしませんでした。それが功を奏したとは軽々に言えませんが、最近では幸運に巡り合うこともあります。が、それは台風の目に入ったひと時の晴れ間で、その前後は相変らず暴風雨に曝されています。

そこで健康寿命を延ばすためという大義名分のもと、少しでも暴風雨を弱めたくて、市内の大会にもシングルス 80 歳以上の部、ダブルスの年齢合計 150 歳以上の部ができることに望みを託しながら、週に 2 日から 3 日の練習に励んでいます。

ところで先の幸運です。時にはネットインやエッジボールで転がり込む得点もありますが、ここでは対人競技の勝敗を左右するドロー (draw) /くじ運のことを述べたいと思います。ドローは引き分ける (tie) とともに、ものを引くという意味があり、決定などを意味する conclusion と組み合わせた draw a conclusion は、結果を出す/導き出すという表現として用いられています。

直近の五輪において興味を抱いたのは、わざと負けて次のステージでの組み合わせを有利に導こうとしているのではないか、という記事です。仰天長嘆しているのでは？と天の気持ちをおもんばかったりもしましたが、もし自分がそのような条件下に置かれたら、や

はり負けただろうとの思いが去来し、青くさい正義感が揺らぎました。

この時ふと、「我、神仏は尊ぶべし、頼むべからず」という言葉が浮かんできました。五輪違いの『五輪の書』を著した宮本武蔵の残した言葉です。吉岡一門との決闘前に立ち寄った八木神社でしたが、祈願せずに去ったという説に因む言葉です。

武蔵にとってはさることながら、凡人にとっての「苦しい時の神頼み」には、一理も二理もあるはずです。「地獄の沙汰も金次第」と知ったうえで、神頼みにおいても賽銭を投じるのですから、不遜にもお金に関しては天も地も人間とさほど変わらないのではないか、と思ったりしています。さらに両句が併存しているのは、憂き世に生きる庶民の知恵なのだろう、と勝手に人間を賛歌しているのです。

そして運と天にまつわることわざを探してみると、「運は天に在り」「運を天に任せる」「運否天賦」などが見つかりました。「運を待つは死を待つのに等しい」には天は見られませんが、相対ことわざとして意義深く、ことわざのメタ認知力を伴うバランス感覚のよさに脱帽せざるを得ません。余談ながら、バランスはリズムとタイミングとともに調整力(coordination)と呼ばれ、体力を構成する大切な要素になっています。

では「待てば海路(甘露)の日和あり」は、死を待つことになるのでしょうか。一般論はさて置き、勝負事においては「止まぬ雨はない」(「雨過天晴」：雨過ぎて天晴る)とうそぶいたり、雨乞いをする程度では、何事も成就しないことは自明です。

「運鈍根」が語るように、愚直に根気強く頑張っても、運がなければ勝つことはできないのは歴史が教えるところです。いわんや不勉強を棚に上げて「棚ぼた」を待つなどは言語道断。「運も実力の内」とするのにも「人事を尽くして天命を待つ」からこそその運だと認識しておきたいものです。

ドローに言及するとシード(seed/順位づけ)にも関心が及びます。シードとは実力のある者やチーム同士が早い段階でぶつからないよう、1回戦や予選が免除されたりにする仕組みです。逆に言えば、弱者は初戦で最強選手やチームと当たることは稀なので、先ずは1勝、という元気が湧いたりもします。

ついでながら駄文を連ねます。シードが動詞になると結実する、種を蒔くという意味になります。シードされるには地道に畑を耕して種を蒔き、肥料や水を施して実らせた実績が必要です。いわゆる練習(技術練習/practice+鍛錬・体力づくり/training)を基に、試合での確かな痕跡を残しておくことが肝要なのです。

卓球カルタ創作への橋脚

誰しもカルタ遊びには楽しい思い出があることでしょう。そのカルタを創るとなると、覚えるだけではない知的要素が加わります。端的には、短い言葉でリズム/語呂を整え、それなりの意味をもたせることが求められる、ということです。

ことわざやカルタを創る作業は、さまざまな〈振り返り〉が反復されます。この言語行為は〈行為の意味づけ〉として高い認知機能を育み、創られた短文に触れることにより、新たな志向を生み出すためのヒントが得られるなどの相乗効果が期待されます。「術語」や「わざ言語」が後先となって新境地を拓く契機になるのです。

実際にはこのような理屈を聞かされても、体験がなければ左から右へと抜けてしまうのが関の山でしょう。しかし、苦勞して励んだ練習効果は後々まで残り、消えてしまったと

思うことでもとある拍子に蘇ってくるものです。《身から出たことわざ》には高い再帰性が備わっているからです。

〈記憶された言葉の鋳型にはめることで、知覚の効率がよくなる〉。これは先ほど紹介した酒井氏の文言を援用してまとめたものです。この意味から、カルタやことわざは言うまでもなく、創作されたことわざの類は絶好の鋳型であって、練習の効率を高める手段に成り得ることは明らかです。これが理解の次元を超え、身に染みているという納得の領域に達しておればなおさらのことです。詰まるところ、豊かな人生を送るとはこのような自分で納得できる言葉をもつことかもしれない、と思ったりもします。

当然ながらカルタ遊びやカルタ創りの有効性は、スポーツに限るものではありません。というより常識的にはその逆ですから、スポーツ人にも発破をかけたいのです。たとえば移ろう世相のことや教育・職人などの職種別カルタとなると、数え切れるものではありません。「上毛かるた」をはじめとする郷土カルタは各地に点在し、島崎藤村の「藤村かるた」といった個人的なものになると無尽蔵です。それが賭博であろうとも、「道斎カルタ」として存在しているのですから、カルタの偉大さは推して知るべしです。

手元にあるいろはカルタに関する著作では、『別冊太陽 いろはかるた』（1997、平凡社）、時田昌瑞氏の『岩波いろはカルタ辞典』（2004、岩波書店）『ことわざで遊ぶいろはかるた』（2007、世界文化社）、吉海直人氏による『いろはかるたの世界』（2010、新典社）が目につきます。ここには日本が誇るいろはカルタの魅力が満載ですが、文句は定番です。

その点、自作となると自由自在です。そこで「マラソンいろは」の2句だけを紹介しておきます。スタートとなる〈い〉は、「痛いところが弱い部位」。この先の長丁場が心配になる句かもしれません。この文句の背景を語った後に、「いやー、私はいつも頭が痛くてねー」とボケてみても、笑ってくれる人は稀で、ツッコミを入れてくれる人はほぼ皆無。ツッコミの本質は愛情ですから、私には愛されるために大切な何かが足りないようです。頭の痛いことです。

そして末尾の〈ん〉。創った句は「ウンと練習ドント・ウォーリー」です。マラソンに強くなるための要素である鈍と根に、勝つために不可欠な運をも掛けました。苦し紛れに英語を用いてリズムカルに凝縮したつもりですが、さてどうでしょう。

この洒落に関して一言。去る8月25日、日本笑い学会大会の分科会では〈死と笑い〉のブースに参加しました。まとまりなど出るはずがないテーマでしたが、終了のアナウンスが聞こえてきた時、思いついて「シ（死・四）の後は何が来るのでしょうか」と真面目に問い掛けました。一瞬の静寂の後、「ゴ（後・五）ですね」と謎を解くと爆笑し、時間差で笑った人がいてまた大笑い。元の席へ戻る人々の背中にはその余韻が漂っていました。

そんなこんなの言葉遊びですが、カルタ/ことわざには謎解きの要素が潜んでいます。謎は〈何ぞ〉が語源のようできて、含蓄のある句には何らかの要素が隠されているものです。謎解きは作者の本音に迫る至福の時空間ではなかったか、と思ったりもしています。

末尾に私家版卓球カルタの一句を示し、次号に架橋すべき橋脚に代えたいと思います。
な「ナックルには袈裟懸け、下回転には雑巾掛け」。レシーブの基本に韻を踏ませた句。ナックルサーブに対してはラケットを上から斜め前下へ、袈裟を掛けるように切り下し、下回転に対しては台上を水平に、あたかも雑巾掛けをするように押し出すという意味。

ことわざ献本珍道記…いにしえの先行く人の跡見れば踏みゆく道は紅に染む

清水 泰生

私は、今も陸上競技の中長距離をしている。世界のマラソン大会はどうなのか知りたくて2013年から海外のマラソン大会等に出ている。その時、学会があればそれも兼ねて行っている。そして、マラソン大会の開催地で日本語教育、日本学関係の機関があれば書籍を献本している。また、講演や授業の依頼があれば、それを行っている。献本の書籍は、国語学の大家故木村晟先生関係の書籍とわが学会の故穴田義孝先生が尽力された『書籍シリーズ《ことわざに聞く》』である。

海外で献本した様子を報告したい。

2014年4月パリマラソン前日のファンランとそのあとパリで行われた学会に参加、そのついでに国際交流基金パリ日本文化会館へ訪問、献本をした。国際交流基金パリ日本文化会館は2024年パリ五輪の日本の拠点となった。

2015年5月プリンストン大学でプリンストン日本語教育フォーラムがあってポスター発表をした。その時にプリンストン大学へ献本した。翌日NYCの10キロのロードレースに出た。

2015年10月ボローニャ大学で国際会議があった。その時に大学に献本。会議のあとベニスに行ってベニスマラソン10キロ部に出た。

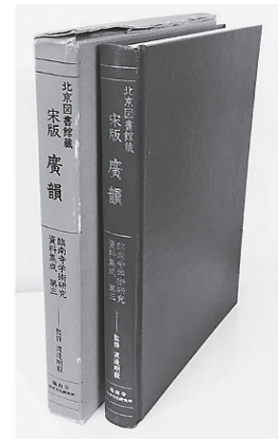
2016年3月ソウル国際マラソンを走る前に高麗大学の先生と会食、その時に献本を行った。そして、翌月4月オーストリアに行った際にウィーン大学の日本学科に訪れて献本をした。ウィーン大学の日本学科の先生と談笑をした。なお、ウィーン大学へは2019年9月にも訪れている。

2016年11月アテネマラソンを走るのを兼ねて、ギリシャ日本大使館で本を献本。残念ながら大学機関で日本語の授業があるところがないようで大使館の図書室へ献本。最初、大使館に入ることは敷居が高そうで無理だと思ったが「当たって砕けろ」の精神で連絡したら是非という返事をいただいた。入口付近の警備室に献本を除いてすべて預かり、空港の検査と同様の厳しいボディチェックがあった。それが終わって図書室へ。献本のあと大使館の図書室の人と談笑。やはり日本語、日本学関係の本はアテネの大学にはなく、ここで、日本語の本を読みたい人のためのサービスを行っているようである。アテネマラソンが終わって、場所をローマに移して、研究発表、そのあと国際交流基金ローマ日本文化会館へ寄り献本した。パリ日本文化会館と同様国際交流基金ローマ日本文化会館図書室が充実していた。漫画の本が多くあったことと日本語の授業が多いことに驚いた。

2017年2月スペインのバルセロナハーフマラソンに走るためにスペインバルセロナへ、



穴田先生が尽力された『書籍シリーズ《ことわざに聞く》』



木村先生がかかわった『臨南寺全書』

バルセロナ自治大学の先生に献本、そしてイギリスへ行き、オックスフォード大学ボドリアン図書館附属日本研究図書館に伺って本を献本。ボドリアン日本図書附属日本研究図書館長と東洋学部長と談笑。陸上のバニスター氏の話から日本語教育の話まで及んだ。そしてバルセロナに戻りバルセロナハーフマラソンを走りそして帰国。

2018年4月嵐のボストンマラソン走った翌日、ハーバード大学イエンチン図書館で献本。図書館の方にボストンマラソン完走メダルを見せたら満面の笑みだった。

2018年11月NYCマラソンを走る前にコロンビア大学の図書館に行き献本をした。NYCで研究発表する予定だったが韓国仁川でトランジットをするときにその会議自体がキャンセルになったことを知り啞然。これを「青天の霹靂」と呼ぶのだろう。

2019年3月世界室内マスターズ陸上選手権大会がポーランドのトルンで開催。世界室内マスターズ陸上選手権大会の会場（室内競技場）の隣がニコラウス・コペルニクス大学で、そこで日本語の授業（ことわざを題材とした新聞記事の紹介）、授業の後、日本語の先生方を交えてことわざの教え方のワークショップ、その翌日スポーツ言語学の講演をこなした。ちなみに、この講演のあと、2022年4月にNY日系人会で「日本語教育でのことわざ教育」という内容でオンライン講演を行った。

2019年10月シカゴマラソンを走る前にシカゴ大学に行き日本語の先生と談笑、図書館で献本をした。シカゴ大学の周りは治安が悪くシカゴ市内の南からタクシーを使って郊外のシカゴ大学まで行った。

2021年9月ベルリンマラソンを走った後、フランクフルト日本文化普及センターへ行き献本した。フランクフルト日本文化普及センターの代表と談笑。日本語教育、日本語教材、辞書の話が話題になり、日本文化普及センター刊行の辞書（日独辞典）を買った。その辞書には日本のことわざが多く記載されていた。

2023年3月世界室内マスターズが再びポーランドのトルンで開催。その時もコペルニクス大学日本学科で特別授業を行った。

2023年4月ロンドンマラソンの前にロンドン大学の先生に会いに行き本を献本。ロンドンマラソンの後、国際交流基金ロンドン日本文化センターへ訪問、献本。日本語講座がなく



ハーバード大学イエンチン図書館



コペルニクス大学日本学科



フランクフルト日本文化普及センター



国際交流基金シドニー日本文化センター図書室

事務所しかなかったのには驚いた。事務所で本の貸し出しを行っているようである。

2023年9月シドニーマラソンを走った。その前に国際交流基金シドニー日本文化センターへ行き本を献本、日本語教育の話を伺った。図書室は国際交流基金ローマ日本文化会館、国際交流基金パリ日本文化会館と同様、充実していた。

2024年3月ソウルマラソンの前々日、国際交流基金ソウル文化センターに訪問し献本。日本語講座は中級以上のオンライン講座のみで対面式の授業がないのに驚いた。ロンドンと同様事務所で本の貸し出しを行っているようである。国際交流基金ロンドンも国際交流基金ソウルもビルの中の一室なので探すのに手間取った。

以上、海外での献本の様子を簡単であるが話した。木村先生、穴田先生には非常にお世話になった。両先生は鬼籍に入られたが本を献本することによって両先生の研究に対する熱い思いを世界の人々に伝えられたらと私は思う。新渡戸稲造氏の「いにしえの先行く人の跡見れば踏みゆく道は紅に染む」の言葉を忘れていけないと私は思っている。そして、「武士道は知識を重んじるものではない。重んずるものは行動である」(武士道)を忘れずこれからも足を運んで献本活動をしたいと思っている。

「ことわざの共通性」

佐古 恵里香

8月下旬に、時田昌瑞先生の新しいご著書『ことわざ探検のススメ』が大修館書店より発売されました。本エッセイでは、こちらのご著書に関連して、「ことわざの共通性」について、考えていきたいと思います。

最初に、簡単な自己紹介となります。現在、私は、日本語教員として、留学生に日本語を教えています。職業病なのかもしれませんが、いつも留学生の母語と日本語の共通点は何だろうかということを意識しているように思います。今回、この「共通点アンテナ」が立ったのは、第4章の「ことわざは世界の共通語？」についてです。こちらの章では、世界各地に存在することわざが調べられており、さらに、日本語のことわざと似ているものや似ていないものについて、紹介されています。また、「遠く離れていて話すことばが違う国や地域にも、同じたとえや似通った形のことわざが少なくありません。そのためことわざは『世界の共通語』と呼ばれることがあります」（時田 2024: 140）という書き出しをヒントに、ことわざの共通性について考えてみたいと思います。

留学生が日本語のことわざを覚える際にも、「ことわざの共通性」が、とても役に立ちます。例えば、「一石二鳥」は、留学生が覚えやすいことわざのように感じます。ことわざの大意は、「1つの石を投げたら2つの鳥を落とせた」であり、その本質は、「ラッキー」という感覚ではないでしょうか。このような驚きや喜びなどの本質的な気持ちは、世界中で、共感を得られやすいのかもしれませんが。このような気持ちの共通性があると、留学生は日本語のことわざだから「覚えにくい」や「難しい」という心の抵抗を減らすことができるように思います。一方、同じ「ラッキー」感を表現していても（当方は大好きなことわざですが）、「棚から牡丹餅」のような、日本語・日本文化を理解しなければ使用できないようなことわざは、覚えるのは大変そうです。まず、写真で日本の「棚」や「牡丹餅」を説明して、江戸時代の「棚」がどんな形状で、「牡丹餅」がどんな味であるかを考えてもらって、江戸時代には、砂糖が貴重品であったことから、庶民は砂糖を使った食べ物である「牡丹餅」をあまり食べることができなかったというような説明が必要になります。

図1は、私が実際に授業で使っている「一石二鳥」と「棚から牡丹餅」のイラストになります。イラストは筆者が描いたものです。

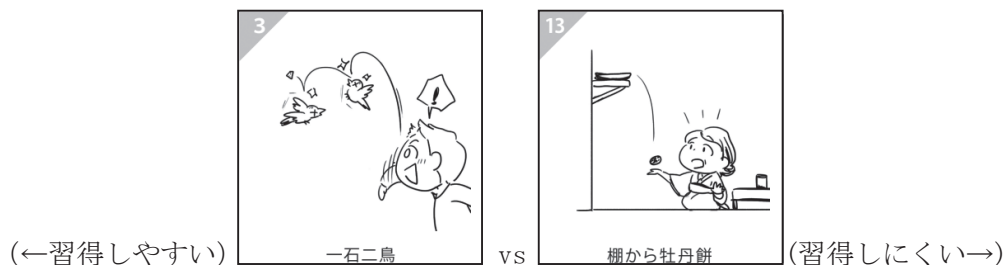


図1 一石二鳥と棚から牡丹餅の日本語授業で使用しているイラスト

最後に、第1章によると、ことわざは、時代によって使用頻度が「変遷」するようです。

ことばですから、人々の意識や社会習慣などが変わったり、社会的価値観と合わなくなったりすると使用率が下がることが想像できます。こちらの「一石二鳥」ということわざが、よく使われるようになったのは、戦後からのようです。

ぜひ、時田先生の新しいご著書をお楽しみください。

参考文献

時田昌瑞『ことわざ探検のススメ』大修館書店 2024

「逢佛殺佛」から「神に逢うては……」へ

藤城 孝輔

今年の4月から月に1回、『毎日新聞』の小学生版である『毎日小学生新聞』で、時田昌瑞氏とことわざに関するコラムの連載を続けている。ことわざについて語源や成り立ちなど普段は意識しないところまで深掘りし、下間文恵氏によるイラストで実際に使えそうな場面を紹介するという企画趣旨である。テーマとして取り上げることわざの大半は、最近生まれたことわざである「やまない雨はない」（2024年5月に掲載）を除けば大きなことわざ辞典に必ず載っているメジャーなものばかりである。しかし、1つのことわざについて300字で意味や語源だけでなく、語源や成り立ちまでわかりやすく解説するのは意外と難しい。子ども向けのコラムだからといって、決して甘いものではない。

特に手間がかかるのは、ことわざの古い用例を探すことである。あらゆる英単語の最初の用例を記録した『オックスフォード英語辞典』のような権威的な文献は、あいにく日本語には存在しない。そのため、ことわざについて解説している二次資料だけでなく、一次資料にもあたって用例を引用してこななければならない。明治以降の資料であれば「国立国会図書館デジタルコレクション」の全文検索がかなり役に立つが、江戸時代以前となるとコーパスとして使える規模までまとまった言語資料は少ない。そのため、先行研究に勉強させてもらうことになるが、それでも自分でやみくもに探しあてた用例がことわざ辞典の類に載っているものよりも古かったときには、ひそかに悦に入った気分になれる。ことわざが時に形を変えながら、現在まで語り継がれていく過程をたどるのは、難しくはあるものの実りの多い作業だといえる。

私が専門とする映像研究において、このような異なるテキストにおける引用の連鎖は、文学研究者ジュリア・クリステヴァの用語である「間テキスト性（*intertextualité*）」という言葉で表される。文学にせよ映画にせよ、作品は作者が無からすべてを創造したわけではなく、過去から伝わる言葉やイメージを織り交ぜた引用の織物（テキスト）で構成されている。簡単にいえば、あらゆるものには元ネタがあり、その元ネタさえも別の何かを参照しているということだ。間テキスト性に着目することは、元ネタをさかのぼって時代や文化を超えたテキスト同士の関係を明らかにすることを可能にする。

例えば、千葉真一が柳生十兵衛を演じて人気を博したテレビ時代劇の傑作『柳生一族の陰謀』（深作欣二ほか演出、1978年）の冒頭には、架空の「裏柳生口伝」として次のような言葉がナレーションで挿入される。

裏柳生口伝に曰く、戦えば必ず勝つ、これ兵法の第一義なり。人としての情を断ちて、神に逢うては神を斬り、仏に逢うては仏を斬り、然る後、初めて極意を得ん。かくの如くんば、行く手を阻む者、悪鬼羅刹の化身なりとも、^{あに}豈遅れをとるべけんや。¹

¹ 『柳生一族の陰謀』コレクターズDVD、第1巻、リーフレット裏表紙。

映画版とテレビ版の『柳生一族の陰謀』以降、千葉は『柳生あばれ旅』（松尾昭典ほか演出、1980～1981年）、『魔界転生』（深作欣二監督、1981年）、『柳生十兵衛あばれ旅』（牧口雄二ほか演出、1982～1983年）、テレビ時代劇『家光と彦佐と一心太助』（舛田利雄演出、1989年）、松方弘樹主演のVシネシリーズ『猿飛佐助 闇の軍団』（宮坂武志監督、2005年）といった具合に、柳生十兵衛を繰り返し演じ続け、柳生十兵衛といえば千葉真一というイメージを確立させていく。そんな中で「神に逢うては……」というこの文言も繰り返し言及されることになる。

千葉の柳生十兵衛と沢田研二演じる天草四郎の超自然的な対決を描く『魔界転生』では、丹波哲郎が演じる刀匠、村正の台詞としてこの言葉が登場する。死からよみがえった天草四郎が魔界から連れてきた魔物を倒すべく、十兵衛は村正に刀の制作を依頼する。全身全霊を注いで十兵衛のために刀を打ち上げた村正は渾身の妖刀村正で神棚を斬ってみせ、「十兵衛さま、神に逢うては神を斬り、魔物に逢うては魔物を斬る。これが村正でございます」と言い残し、絶命する。台詞の引用を通してテレビ版『柳生一族の陰謀』を喚起することで、妖刀村正を携えて敵に向かう千葉／十兵衛の人物像に奥行きを与えているといえるだろう。

さらに時代は下って、千葉が沖縄で寿司屋をいとなむ刀匠、ハットリ・ハンゾウを演じたクエンティン・タランティーノ監督作『キル・ビル』（2003年）では、二度この文言が引用される。映画の序盤では、千葉の日本語のナレーションで以下のように語られる。

武士たる者、戦いに臨んではただ己の敵を倒すことに専念すべし。一切の喜怒哀楽、さらに情は無用なり。邪魔だてする者、それがたとえ神といえども仏といえども、これを斬るべし。これすなわち、戦いの根本に隠れし極意。

さらに、ハットリの刀を求めて沖縄にやって来た主人公に、ハットリは一か月かけて刀を作り、「戦いの途上で、神が立ちほだかれば神をも斬れるであろう」と言って主人公に刀を授ける。「ハットリ・ハンゾウ」という人物名はもちろん千葉の別の代表的時代劇である『服部半蔵 影の軍団』（黒田義之ほか演出、1980年）からの引用であるが、ここではナレーションを通して『柳生一族の陰謀』が、さらに刀匠の台詞として『魔界転生』が踏襲されていると考えられる。さらに、映画の終盤ではテレビ版の『柳生一族の陰謀』からテーマ音楽を引用することで、本作は全編を通してアクションスターとしてのサニー・チバ／千葉真一に対するオマージュを捧げている。

もちろん、この文言は『柳生一族の陰謀』のオリジナルなどではあり得ない。さかのぼれば、10世紀に唐代中国で編まれた経典『臨濟録』にある「逢佛殺佛 逢祖殺祖 逢羅漢殺羅漢 逢父母殺父母（仏に逢うては仏を斬る、親に逢うては親を斬る、云々）～」²という言葉にまでたどり着く。千葉がはじめて挑んだ本格時代劇である『柳生一族の陰謀』以降、千葉が演じる武士のイメージを築き上げるうえで、この引用の織物が果たした役割は大きい。

² 「実用日本語表現辞典」Weblio 辞書、2021年8月6日、
<https://www.weblio.jp/content/%E9%80%A2%E4%BB%8F%E6%AE%BA%E4%BB%8F>

認知症介護と＜負けるが勝ち＞

小森 英明

「戦術で勝って、戦略で負ける」、このことは旧日本軍の体質をよく表しているものとして、識者の間で揶揄交じりに言われました。

明らかに、‘戦術(Tactics)’次元は、‘戦略(Strategy)’次元の下位概念です。そしてこの通り、日本の上級指揮官たちには、概して‘戦略’の感覚が抜け落ちていました。だからこそ、政治と軍事の関係も上手く機能していなかったのだ、と思います。

加えて、当時の陸大や海大のカリキュラムを調べてみると、何と‘戦略’を主テーマに据えた講義すら盛り込まれていなかったようです。

こうした事情を勘案すると、むしろ、連合国側の指揮官の方が＜負けるが勝ち＞といった諺を知っていたのではないかと私などは勘繰りたくなります。

時田昌瑞氏が著した『岩波ことわざ辞典』（岩波書店 2014）によれば、この＜負けるが勝ち＞は「その場では勝ちを相手に譲っても、長い目で見れば自分の方が優位になるということ」がその中心の意味となります（同書557頁）。先の例で言えば、戦争が長引けば長引くほど、結果的に旧日本軍が不利になったことと、ほぼ同義となります。

さらに同氏は、これを「逆説の技法と用いたことわざとしてよく知られている」と予めことわった上で、「無用な争いを避けるための方法」とも指摘されております。

このうち、「逆説の技法を用いた」諺と見做せば、かつて鈴木大拙（1870～1966）が唱えたところの、『金剛般若経』に由来する‘即非の論理’を彷彿させます。

この論理は、「AすなわちA、Aすなわち非A、故にAすなわちA」ということであって、「Aすなわち非A」に‘逆説’の部分が該当します。

そして、この諺を‘即非の論理’に当てはめてみると、「‘負け’すなわち‘負け’、‘負け’すなわち‘勝ち’（＜負けるが勝ち＞）、故に‘負け’すなわち‘負け’」という図式になるかと思われます。このように同じ‘負け’は‘負け’であっても、前部の‘負け’の場合は相対の次元に甘んじているのに対し、後部の‘負け’場合は、‘逆説’を経ることで、自ずと絶対の次元へと昇華されています（無分別の分別）。

つまり、真の負けを知悉する者こそが、真の勝者になる捷徑（近道）となる訳です。

一方、この諺を「無用な争いを避けるための方法」と解釈すれば、中世もしくは近世に確立された、わが国特有の法規制であるところの‘喧嘩両成敗（喧嘩に際して、双方とも均等に処罰すること）’という発想に発展しかねず、悪しき意味での‘事なかれ主義’に行き着いてしまいかねません。

これはしかも、英語で言う‘Cowboy Justice（カウボーイの正義、‘やられたら、やり返せ！’）」を標榜してやまない米国人等には想像もつかない、正に対極の考え方です。この諺を字義通りに解している限り、そうなること必定です。

そこで、私はこの諺の意味合いをより善用させるべく、認知症介護の場合をここで考えてみたいと思います。

私の実母（満88歳）はアルツハイマー中期の認知症（要介護1）を現在、患っております。そのせいか、時折、本人の易怒性（いどせい、怒りっぽさのこと）や暴言癖が悪化し

ます（男言葉を使って相手を罵る、手元にある電卓やスリッパを投げつける、等）。

そんな時、周りがこれを判断するコツは、母の顔つき（顔相・形相）の変化を即座に読み取ることです。映画『ジキル博士とハイド氏』の主人公のように、必ず顔つきが著しく変化します。そして、こちらは「今、（怒りの）スイッチが入った！」と判断します。

この次の段階から、母からの反撃を上手にかわす必要が生じます。先ず、私は母の変容に際して、「全ては苦しみの表現であり、接する側は＜負けるが勝ち＞」と、静かに自分に対して念じます。そうすると、不思議と母の言動に対して傷つかなくなります。

豹変した本人を目の前にして、こちらも「負けじ！」と変わってしまう点が、事実をして、それらをより困難なもの、乗り越え不可能なものに見せてしまうのです。

工藤広伸（くどうひろのぶ）氏も、私同様、実母を介護されており、東京と岩手の間を往復されています（『認知症介護で倒れないための55の心得』廣済堂出版、2019年）。

その著書の中で、やはり＜負けるが勝ち＞という諺が用いられています（同書70頁）。

認知症介護は「負けるが勝ち」です。

（前略；小森）勝ちたいと思ったら、負けるのです。相手に勝ちを譲るのです。勝ちたいとおもえば反撃されます。

わたしの場合でいえば、親族が部屋に入ってモノを奪うという母の妄想に対して、盗ってないという正論でロゲンカに勝とうとせず、母の妄想を受け入れてわざと負けます。「盗るわけない！」といえ、**「だって、ズカズカ入ってきたんだよ」**とさらに反撃されます。

ロゲンカの勝者を母にすることで、わたしは火に油を注ぐことなく、母は落ち着き、結果、わたし自身も安堵できる。

最終的には自分に本当の意味の勝ちをもたらすのです。

さらに、認知症の人は、健常者のように自分が自分に対して命令ができません。その反面、反撃力は一歩前にあります。これが実に厄介な点です。まるで大きな子供をあやしているようでもあります。こうした母を動かす上では、（認知症介護でよく言われるところの）‘説得’するよりも、本人自身の‘納得感’に訴える方が、ベターとなるようです。

しかしながら、私の母の場合は、この頃、易怒性や暴言癖が以前と比べて、何だか少々弱ってきたような気がします。そのせいか、家族を相手にまるで反抗期の子供のように暴れていた頃の母の認知症状が、今となっては却って懐かしく思い出されます。

翻って、この諺（＜負けるが勝ち＞）の何よりの効用は、私にとって‘肩の力が抜けること’にあります。すなわち、自分自身が自然体（態）になれることにある点です。ですから、認知症を患った母とも（何とか）やっていけるのでしょう。

また、この諺の魅力は、‘負け’の美学を実に短い言葉で以て、高らかに謳っていることです（‘勝ち’）。常勝思考は大変結構ですが、そんな考えを常に抱いている人ほど、何となく大人になり切れていないイメージが私にはあります。このことを裏返すと、大人とは、負けることを自分なりにわかっている人のことを言うのではないのでしょうか？

何れにせよ、負けの効用を知悉する日本人、そして、そのことを諺にまで結晶させてしまった発想には、正に脱帽です。

持続可能な社会づくりとことわざ

辻本 雄次

1. 持続可能な社会

「持続可能」や「SDGs (Sustainable Development Goals : 持続可能な開発目標)」は今流りの言葉で、その具体的な行動事例が小学校の社会や理科等の教科書でも取り上げられています。¹⁾ こんなに早くからと思いましたが、文科省はESD (Education for Sustainable Development : 持続可能な開発のための教育) を初等教育から推進²⁾しています。ESDはSDGsの目標4「質の高い教育をみんなに」のターゲットにもなっており、まさに「鉄は熱いうちに打て」です。「持続可能な開発」は「Development that meets the needs of the present without compromising the ability of future generations to meet their own needs : 将来の世代の欲求を満たしつつ、現在の世代の欲求も満足させるような開発」と定義^{3,4)}され、「開発」を「社会」と読み替えれば「持続可能な社会」となります。17個の持続可能な開発目標は2030年までにすべての国が達成すべきとされています。

2. 持続可能な社会づくりに役立つことわざ

ことわざ素人の私が持続可能な社会づくりに役立つことわざを取り上げるのは甚だ僭越とは存じますが、現職の時に環境分野を多少専門にしておりましたのでお許し願います。なお、創作ことわざを取り入れる「エコとわざ」活動を本学会が指導・支援されており、持続可能な社会づくりに創作ことわざを役立たせる取り組みとなっています。ここでは、持続可能な社会づくりに役立つのではと思われることわざの例をいくつかあげてみたいと思います。

まずこのことわざはどうでしょうか。「寝たふりをしている人を目覚めさせることはできない。 : You can't wake a person who's pretending to be asleep.」⁵⁾というもので、アメリカ先住民のナバホ族に伝えられていることわざだそうです。持続可能な社会づくりのため、経済・環境・社会すべてを統合した新たな目標(SDGs)が設定されても、それに耳を貸そうとしない人もいるようで、そのような人に変化を促すことは難しいといえます。しかしそのような人が多いとSDGsの達成は難しくなります。そのためにも冒頭のESDは重要と言えます。

次もネットサーフィンで見つけたものです。「早く行きたければ、ひとりで行け。遠くまで行きたければ、みんなで行け。 : If you want to go fast, go alone. If you want to go far, go together.」⁶⁾というものでアフリカのことわざです。こちらは結構知られているようです。このことわざの後半部「遠くまで」を「持続可能な開発を達成するまで」と読み替えれば、SDGsの目標17「パートナーシップで目標を達成しよう」と符合します。

ネットで見つけたスウェーデンの次のことわざはシンプルで気に入っています。「全てが出来る人はいないけれど、だれでも何か出来る。 : Ingen kan allt, men alla kan något.」⁷⁾というもので、一人一人が尊重されることにつながります。少しニュアンスが異なりますが、「十人十色」と類似しているように思えます。

同じくネットで見つけました「無駄がなければ、不足することもない : Waste not, want not.」⁸⁾はアメリカ版「もったいない」。このことわざは裏返すと「物をごみにしてしまうか

らまたその物が必要になる)」ということを言っています。SDGsの目標12「つくる責任、つかう責任」に合致します。なお日本ではかなり以前から、発生抑制(Reduce)＞再使用(Reuse)＞リサイクル(Recycle)と優先順位を付けた循環型の廃棄物対策が行われています。

次にことわざ辞典⁹⁾から探してみました。一つ目は「**所変われば品変わる**：土地が変われば習慣や風俗、言葉が違うということ。また、同じものでも名称や用途が変わること」です。これは「多文化共生」につながります。「多文化共生」はSDGsの目標3「すべての人に健康と福祉を」、目標10「人や国の不平等をなくそう」、目標11「住み続けられるまちづくりを」等に欠かすことができないと思われます。

次は「**貧すれば鈍す**：貧乏は暮らしを貧しくするだけでなく、精神も愚鈍にするということ」。SDGsの目標1「貧困をなくそう」にある通りで、貧困を撲滅しないと例えば目標4「質の高い教育をみんなに」も難しくなり、結果としてことわざの説明のようなことになります。

そしてもう一つ、「**門前の小僧習わぬ経を読む**：人は環境に強く影響されるという譬え」。SDGsの達成に向けた行動をしている人や団体がまわりにあれば、他の人や団体に良い影響を与えることになります。

ところで持続可能な社会をどのようにして作っていくのかは地域や国によって異なります。「二酸化炭素を出さない『脱炭素』のため、石炭火力発電所を廃止したら失業者急増（南アフリカ共和国）」という新聞記事がありました（2023年6月7日付け毎日新聞朝刊）。思い切った変化が求められていますが、「**念には念を入れよ**」も忘れてはいけません。

<参考>

- 1) あなたの静岡新聞：小学教科書でSDGs探究 「自分とのつながり」重視
<https://www.at-s.com/news/article/national/1222829.html>
- 2) 文部科学省：持続可能な開発のための教育(ESD: Education for Sustainable Development)
<https://www.mext.go.jp/unesco/004/1339957.htm>
- 3) UN(国連)：The Sustainable Development Agenda, Sustainable Development Goals
<https://www.un.org/sustainabledevelopment/development-agenda/>
- 4) 外務省：持続可能な開発
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/kankyo/wssd/wssd.html>
- 5) サステナブル・ブランドジャパン：「リジェネレーション」に目覚めたリーダーシップ
https://www.sustainablebrands.jp/community/column/detail/1197190_2557.html
- 6) ウェイクアップ：早く行きたければ一人で行け、遠くへ行きたければみんなで行け
<https://wakeup-group.com/buzz/211105-2>
- 7) ボルボ：スウェーデンの男女平等, Sustainable for Life
<https://v-sustainability.jp/stories13/>
- 8) IHCWAY：Waste not, want not
<https://www.ihcway.com/1day/20180912104821.html>
- 9) 日本ことわざ文化学会編，時田昌瑞・山口政信監修：世界ことわざ比較辞典，(株)岩波書店，2020年3月26日.

【執筆者紹介（五十音順）】

① 氏名 ② 出身地 ③ 所属

① 蟻川 剛 ② 東京都出身
③ 日本ことわざ文化学会理事

① 小森 英明 ② 三重県出身
③ 武蔵野大学仏教文化研究所客員研究員、日本笑い学会三重支部運営委員

① 佐古 恵里香 ② 愛媛県出身
③ 流通科学大学特任講師、日本ことわざ文化学会理事

① 清水 泰生 ② 和歌山県出身
③ 同志社大学日本語日本文化教育センター嘱託講師、日本ことわざ文化学会理事

① 辻本 雄次 ② 大阪府出身
③ 元 大阪市立環境科学研究所 研究主幹

① 時田 昌瑞 ② 千葉県出身
③ ことわざ・いろはカルタ研究家、日本ことわざ文化学会副会長

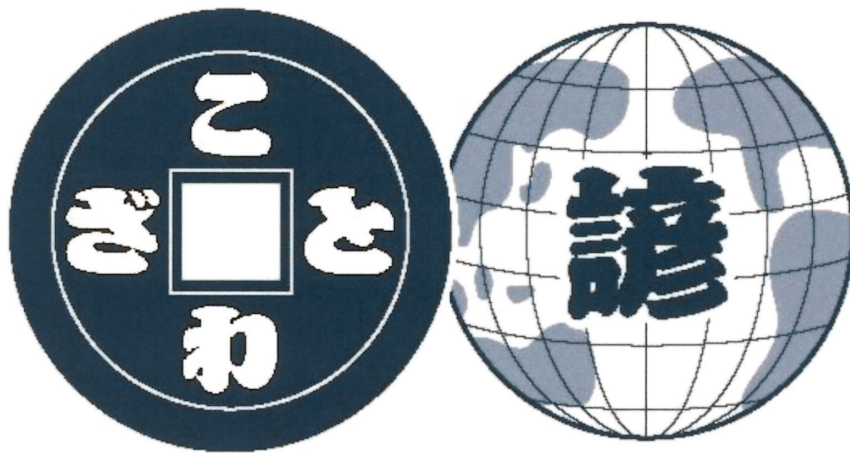
① 藤城 孝輔 ② 沖縄県出身
③ 岡山理科大学講師、日本ことわざ文化学会理事

① 三木 恒治 ② 岡山県出身
③ 岡山理科大学特任教授、日本ことわざ文化学会副会長

① 山口 政信 ② 徳島県出身
③ 明治大学名誉教授、日本ことわざ文化学会事務局長

① 渡辺 慎介 ② 神奈川県出身
③ 横浜国立大学名誉教授、日本ことわざ文化学会会長

日本ことわざ文化学会



ホームページ <https://www.kotowaza-bunka.org/>

『コトワザあらかると』

2024 年 12 月 15 日 第 8 号第 1 刷発行

発行者：日本ことわざ文化学会 ©

「日本ことわざ文化学会」事務局

所在地：〒 700-0005 岡山市北区理大町 1-1

岡山理科大学教育学部 藤城研究室

学会 HP : <https://www.kotowaza-bunka.org/>

E-mail : paremio@gmail.com